

平成 19 年度卒業制作

せんだいメディアテークはどのように成功しなかったか
設立の経緯から現在の活動までを検証する

武蔵野美術大学 造形学部通信教育課程

芸術文化学科 文化支援コース

上村武男

《目次》

はじめに 仙台市民にとってのメディアテークとは	1
序論	2
1. 本研究の目的	2
2. 何をメディアテーク「成功」の条件とするか	2
3. メディアテーク設計競技に提示された課題	3
4. 設計競技での課題を踏まえ、達成課題を設定	5
本論	8
第1章 せんだいメディアテークの施設概要	8
1. 1 メディアテークの意味	8
1. 2 建物としての特徴	8
1. 3 メディアテークの施設内容	9
1. 3. 1 公開空地としてのプラザ	10
1. 3. 2 市民図書館	10
1. 3. 3 ギャラリー	10
1. 3. 4 スタジオ	10
第2章 仙台市の位置－民力と文化施設の点から	11
2. 1 東北地方における仙台の優位性	11
2. 2 政令指定都市における美術振興状況	11
2. 3 仙台市の文化芸術振興の基本姿勢と文化施設整備状況	12
第3章 せんだいメディアテーク設立の経緯	14
3. 1 設立経緯検証の対象とする時期について	14
3. 2 メディアテークに関わった市長たち	14
3. 2. 1 ゼネコン汚職と石井亨	14
3. 2. 2 堅実な市政を行った藤井黎	15
3. 2. 3 生涯学習の施策で論議を呼ぶ梅原市政	16
3. 3 複合施設構想ができあがるまで（1988～1993年）	17

3. 3. 1	まず「市民ギャラリー」と「近代文学館」の複合施設で検討される	17
3. 3. 2	「市民ギャラリー」と「市民図書館」の組み合わせに決定	19
3. 3. 3	新市民ギャラリー建設検討委員会の基本構想と市立美術館の棚上げ	20
3. 4	設計競技の実施（1994～1995年）	22
3. 4. 1	メディアテークの仕様はどのように決まったか	22
3. 4. 2	メディアテーク名称決定の経緯	22
3. 4. 3	設計競技の実際	25
3. 5	開館までに行われた様々な議論（1995～2001年）	26
3. 5. 1	プロジェクト検討委員会の発足	26
3. 5. 2	プロジェクトチームの発足	28
3. 5. 3	宮城県芸術協会をめぐるやりとり	30
3. 6	館長決定までの顛末とメディアテーク開館	30
第4章	せんだいメディアテークの活動と仙台市の文化芸術振興	32
4. 1	メディアテークの活動	32
4. 1. 1	メディアテーク管理運営の実際	32
4. 1. 2	自主イベントの数値分析	33
4. 1. 3	ギャラリーでの展示企画の分析	34
4. 1. 4	市民図書館としての位置づけの曖昧さ	36
4. 2	仙台市の文化芸術振興	37
4. 2. 1	「仙台方式」での「彫刻のあるまちづくり」	37
4. 2. 2	「仙台市都市ビジョン」から読む文化芸術振興	37
終章		40
1.	「せんだいメディアテーク」は成功したと言えるのか	40
1. 1	ミュージアムとしてのメディアテーク	40
1. 2	メディアの棚としてのメディアテーク	41
1. 3	メディアテークとしての一体的な運営がされているか	42
2.	メディアテークをめぐる事象から学び取れること	43
2. 1	公共施設を計画するとき、地方自治体はどう主体性を保つか	43
2. 2	テクノロジーの進歩にどのように対応するか	43

2. 3 施設に対する行政評価の必要性	44
おわりに せんだいメディアテーク、そして仙台の明日に向けて	45
注	47
図表・メディアテーク関連年表・参考資料	巻末

はじめに 仙台市民にとってのメディアテークとは

杜の都仙台。人口百万人を擁し、経済的にも文化的にも宮城県の中心に位置する。その仙台の街の中心を、東から西へと走る定禅寺通。春には「仙台青葉まつり」、秋には「定禅寺ストリートジャズフェスティバル」、そしてクリスマスの季節には「SENDAI 光のページェント」と季節を賑やかにするお祭りの舞台となる。この常禅寺通沿いの一角に、せんだいメディアテークはある。伊東豊雄の設計になる建物は、前面をおおうガラスが美しい。そこに定禅寺通の緑豊かなケヤキ並木や、冬の白い雪が映し出される。

せんだいメディアテークという現代的な名称ではあるが、この建物は仙台市によって建設されたれっきとした公共の施設である。私が仙台に転居したのが約四年前。たまたませんだいメディアテークから歩いて 10 分ほどのところに住んでいるため、よく訪れる。当初の目的は、ここにある図書館を利用するためである。

その後、武蔵野美術大学に入り、文化支援について学ぶ中で、せんだいメディアテークに対する期待や評判が高いことを知った。それも、単なる公共施設としての評価ではなく、ミュージアムとしての期待や評判である。

何回もこの施設を訪れた実感と、ギャップがあった。「そんなすごい施設なのか？」という、直感的な感想を抱いた。これが、本研究を書こうとした「きっかけ」のようなものである。地元仙台に住む市民として、せんだいメディアテークとは何か、を検証してみたい、との思いが、この論文を書かせた本源的な理由である。

序論

1. 本研究の目的

この研究の目的は、2001年1月に開館した、宮城県仙台市に所在する公共施設であるせんだいメディアテーク（以下メディアテークと略する）を研究対象として、現在での評価をしようとするものである。本研究では以下の2つの事項について、検証と考察を行っていく。

第一に、メディアテークを設立するにあたり、掲げられた理念、サービスなどを検証し、現時点ではそれらが実現されていないことを明確にする。メディアテークの建設が決めるまでの過程で、そして建設が決められてから以降にも、メディアテークという施設をめぐる様々な議論が交わされた。それは主に行政、市民、外部の有識者などによって行われた議論であり、メディアテークをよりよいものにつくり上げようとするものであった。しかしながら、開館から7年が経過した2008年の現在、開館時に掲げられたメディアテークが目指そうとしたものは、十分達成されているとは判断できない。この理由を、歴史的事実をもとに明確にする。

第二に、メディアテークが施設としての目標を達成していないとすれば、この施設を設立した仙台市にその責任があると考えられる。メディアテークの設立経緯から現在の活動まで検証することを通じて、仙台市における文化芸術振興への取り組みを考察する。仙台市の文化芸術振興の施策で、どの点が評価され、どの点が問題なのかを検証していく。

2. 何をメディアテーク「成功」の条件とするか

タイトルでわかるように、本研究ではメディアテークが「成功しなかったこと」を論証することが第一の目的である。これから論を進めていく前提として、メディアテークが成功するための達成目標を明確にしておく必要がある。この達成目標が「達成されていない」ことを論証することが、本論文でのひとつの目的である。

さて、何を達成目標とするか。メディアテークの公式ウェブサイト*1（以下メディアテークウェブサイトと略）をみると、「理念・サービス」という項目がある。最初に以下の文章が記載されている。

せんだいメディアテークは、美術や映像文化の活動拠点であると同時に、すべての人々がさまざまなメディアを通じて自由に情報のやりとりを行い、使いこなせるようにお手

伝いする公共施設です。そのために次のような理念に基づいたサービスとプログラムを用意しています。

続いて「理念」として次の3項目が掲げられている。

- ・ **最先端の知と文化を提供(サービス)**

利用者の需要にフレキシブルに対応します。

- ・ **端末(ターミナル)ではなく節点(ノード)へ**

ネットワークの利点を最大限に活用します。

- ・ **あらゆる障壁(バリア)からの自由**

健常者と障害者、利用者と運営者、言語や文化などの障壁を乗り越えます。

この理念は、メディアテークが目指すものであるが、その内容は抽象的なものであり、達成目標とすることは難しい。それでは、何を達成目標とすればいいのか。

3. メディアテーク設計競技に提示された課題

『せんだいメディアテークコンセプトブック』と題された書籍がある。2001年3月に発刊され、それ以降2003年、2005年に増補版が出されている。2005年に発刊された『せんだいメディアテーク コンセプトブック 増補新版*2』はメディアテークウェブサイト内の「せんだいメディアテークが企画・発行した書籍*3」に掲載されており、メディアテークのコンセプトを記述した公式な書籍と判断される。

この書籍にメディアテークの設計者・伊東豊雄*4による「アンダーコンストラクション」と題された文章がある*5。ここで伊東はメディアテークの設計競技(1994~1995年に行われたメディアテークの設計コンペ)にあたって、小野田泰明(当時東北大助手)が応募要綱を作成するにあたり整理した課題として、以下の6課題を提示している。以下に引用する。

- (1) 機能の複合化：都市中心部、常禅寺通沿いに獲得した4,000 m²というまとまった敷地に、望まれる都市機能を入れ込むこと。
- (2) アート：既存の地方展*6が開催可能な十分な広さを有するだけでなく、専従の学芸員を配したワークショップ部門、新しい時代に合わせたメディアミックス機能を充実さ

せるための映像メディアセンター部門も併設すること。

- (3) 情報・メディア（図書）：従来型の図書館機能に加えて、音響・ビジュアル関係の資料（究極的にはアートも包含しうる）も一体化したサービスを提供し、また通信・ネットワークへの対応も行う。「本」に向かい合う空間にとどまらず、「情報」をピックアップするための場を求めること。
- (4) 運営：サービスの高度化、空間資源の合理的な活用、脱境界化のために従来個々に運営されてきた各施設機能を一体的に運営すること。
- (5) 都市：21世紀の仙台の都市構造を形成する重要なプロジェクトであり、世界に誇れる仙台の顔を目指す。また敷地周辺既存街区の活性化の起爆剤となること。
- (6) 設計競技：昨今の行政が行う施設計画に際しての不透明さが生んださまざまな問題を払拭するとともに、透明性の高いオープンな方法で設計者を選定すること。

せんだいメディアテーク設計競技の実施経緯は第3章にて述べるが、ここではこの6つの課題が小野田によってつくられた経緯を記す。これについては、『（仮称）せんだいメディアテーク設計競技記録*7』に収められた小野田による文章「せんだいメディアテーク・デザイン・コンペティション概説*8」に詳述されている。

この文章によれば、仙台市は1994年2月にメディアテークを設計競技で設計者を決める方針を固める*9。そして複雑な与件を専門的な観点から整理するため、新市民ギャラリーの計画（メディアテークが建設される要因のひとつに、「新市民ギャラリー」の設立があった。新市民ギャラリーの計画経緯については3.3で詳述する）に建築サイドから関わってきた菅野實（当時東北大学工学部建築学科助教授）に「新市民ギャラリー等建設事業に関わるコンペ応募要綱作成等の業務」の委託を行う。

この委託を受け、当時菅野研究室に属していた小野田が、仙台市の主管課である生涯学習課（当時は社会教育課）とともにフレームワーク*10に携わることになる。

そして、菅野が委託を受けた時点における条件や市からの要望を、小野田が6つの課題に集約して、作業を進めた*11。

以上が6つの課題がつくられた経緯である*12。小野田作成の6つの課題を、伊東は自分の文章「アンダーコンストラクション」で引用提示した。その内容は小野田案に忠実なものである。

この6つの課題を、メディアテークの施設としての達成目標に設定できるのだろうか。

4. 設計競技での課題を踏まえ、達成課題を設定

6つの課題をメディアテークの達成目標とすることの問題点は何だろうか。6課題は、設計競技の応募要綱作成のために整理されたものであり、メディアテークの施設としての活動を評価するための達成課題ではない。一部の美術館、博物館では、館の理念を具体的に示した活動方針を示している*13。活動方針は具体的な内容のものであり、その内容によっては館の達成目標に設定できると考える。しかし、メディアテークでは活動方針に準ずる内容は公開されていない。

また、公共施設の評価を行う自治体も近年増えてきている。例えば東京都では2000年に江戸東京博物館、東京都庭園美術館などの評価を行い、公表している。また、静岡県立美術館でも2005年度に自己評価を行い、公表している。この行政評価がメディアテークに対して行われれば、「成功」しているかの判断基準になると考えられるのだが、仙台市では現在公共施設の行政評価は行われていない。

一般的な行政評価においては、その方法論において、まず達成目標を設定する。そして、評価判断するための数値目標を決め、定量的な評価を行う。東京都の行政評価や静岡県立美術館の自己評価でも、達成目標の数値化がされている。

6つの課題を達成目標とすると、この数値目標の設定とそれに対する評価判断ができないことになる。これが問題点として指摘できる。

しかし先に述べたように、メディアテークにおいては達成目標にあたるものも公開されておらず、行政評価も行われていない。したがって本研究においては、6つの課題をもとに、メディアテークが成功しているとするための達成目標として、次の3項目を設定する。

①アート：ミュージアムとしての役割を果たしているか

本論で詳述するが、現在仙台市には市立美術館は設立されておらず、またその計画も具体化していない。この事情からメディアテークは「仙台市立のミュージアム」としての役割を、部分的にでも果たすべきと考える。

ここで言うミュージアムとは、アートミュージアム＝美術館とする。仙台市には仙台市立博物館があり、メディアテークはアートミュージアムの役割を果たすべきだと考えるからである。

メディアテークはミュージアムか、という反論もあろう。しかし、本学の教科書『ミューゼオロジー入門*14』の「日本のミュージアム」にメディアテークはこう紹介されている。

「現在、もっとも新しいタイプのミュージアムということができる」

メディアテークをミュージアムとすることに問題はない*15。

ミュージアムとしての役割とは何か。博物館法第 2 条を踏まえて言えば、美術作品の「収集」と「保存」。「展示」の企画と実施。美術作品の「研究」。そして市民への「教育普及」活動。この 5 つがミュージアムの役割、やるべきことであると考えられる。

メディアテークにおいては、このミュージアムの役割の中で「展示」と「教育普及」の 2 つは行うことが可能であり、行うべきである。

また、違う表現をすれば、美術作品を所蔵しないながらも、学芸員がいる（もしくはその機能がある）アート専用スペースである「アートセンター」としての役割を果たしているか、である。

なお、本論で言うアートセンターとは、具体的にはメディアテークと同じ東北地方、青森県にある「国際芸術センター青森」をひとつの目指すべき事例として考えていることを付け加えておく。

前節で示した設計競技での課題（2）も「アート」についての課題である。これも踏まえ、ミュージアムとしてのメディアテークを評価することを、ひとつめの達成目標と設定する。

②メディア：「メディアの棚」の機能を十分果たしているか

設計競技の課題（3）は、「情報・メディア」についての課題である。本論で触れるが、メディアテークとは「メディアを収める棚」を意味している。すでに紹介したようにメディアテークウェブサイトには、

「すべての人々がさまざまなメディアを通じて自由に情報のやりとりを行い、使いこなせるようにお手伝いする公共施設です」

とある。

また、メディアテークの設計競技「（仮称）せんだいメディアテーク設計競技」の応募要綱にメディアテークの定義として、こう記述されている。

「メディアテークとは、感性のメディアとしてのアート、知性のメディアとしての図書や各種情報、そしてそれらが融合した新しいメディアとしての映像等を総合的に集積・蓄積するとともに、市民ひとりひとりが自ら創造し発信者となることを支援する、新しい時代の新しい都市機能空間をイメージするもの*16」

メディアテークにおいては、その言葉が意味するようにメディアが棚に収められ、その

メディアが十分機能し、利用者が使いやすいように提供されているかが問われる。メディアの棚が十分機能しているか否かは、施設の構想に関わる重要なことである。

これを2つめの達成目標とする。

③運営：施設としての一体的な運営がされているか

メディアテークは、単なる生涯学習施設ではないはずである。「メディアテーク」というコンセプトを提示し、新しいタイプの施設を目指してつくられた。施設に入っている各機能が独立して運営されるならば、それは単なる複合的な生涯学習施設でしかない。施設が一体的に運営されることが重要である。

先に示した設計競技の課題（4）にも

「各施設機能を一体的に運営すること」

とある。ただ、設計競技が行われた時点から公共施設を取り巻く環境は変化している。指定管理者制度が導入され、これも本論で詳述するがメディアテークも部分的に指定管理者制度で運営されている。

メディアテークが仙台市の事情で一体的な運営ができないとすれば、それこそ運営側に障害があるはずで、先に紹介したメディアテークの理念にある、

「あらゆる障壁(バリア)からの自由」

を実現したとは言ない。

メディアテークが実質的に一体的に運営されているかを、3つめの達成目標とする。

設計競技での課題の（2）（3）（4）を踏まえ、本件研究では以上3つの課題を、メディアテークが成功しているか否かを評価するための達成目標として提示する。

以下に、本論として4つの章立てで研究を進めていく。

本論

第1章 せんだいメディアテークの施設概要

メディアテークは、デパートの三越やファッションビルが141軒ある仙台一の繁華街から徒歩5分程の距離にある。そのせいもあり、平日でも多くの人々がメディアテークを訪れる。

建物のエントランスを入ると、オープンスクエアがある。そこでは、ほとんど毎日、なんらかの催しものが開催されている。メディアテーク主催のイベントもあるが、大半は企業や団体によるイベント、展示会、講演会等であり、これを目的に訪れる人も多い。

また、3階の市民図書館も利用者は多い。平日は夜8時まで開館しており便利である。

美術家や美術団体に利用されているのが、5階と6階のギャラリーである。個展や団体展に活用されている。7階のシアターでは頻繁に映画上映が行われ、映画ファンには楽しいスペースとなっている。

以下の節にて、メディアテーク名称の意味、建物の特徴、施設内容について紹介する。

1. 1 メディアテークの意味

メディアテークの意味を知る人は、利用者の中でも少ないのではないかと。『せんだいメディアテーク コンセプトブック』には

「メディアテークとはフランス語で『メディアを収める棚』を意味しています」

とある。続けて

「書籍を収める図書館は『ビブリオテーク*17』と呼ばれていますが、メディアテークは書籍に加えてビデオテープやDVD、CDやCD-ROMなど映像や音楽などをはじめとする多様な表現媒体を集め、保管し、利用者に提供する、総合的な文化施設の名称です」

とその意味を定義している。

この施設にメディアテークの名称がつけられた経緯は、第3章で検証する。

1. 2 建物としての特徴

前述したようにこの建物の設計者は伊東豊雄。伊東によれば、

「せんだいメディアテークの建築原理は3つの要素で成立する。すなわち、プレート（床）、チューブ（柱）、スキン（ファサードあるいは外壁）である*18」

と言う。

高さ7階、地下2階の建物は、東西50m、南北49mのほぼ正方形で同じ大きさのプレート（床）が6枚重ねられており、これを13本のチューブが支える構造をとっている。建物には柱も、梁もなく、チューブのみが床を支える役目をしている。

チューブは床を支える機能とともに、屋上からの自然光を取り入れる役目もしている。さらに、いくつかのチューブにはエレベーターや階段が収められている。また、空調や電気、ネットワークの配管もチューブ内に収められ、火災時には排煙の経路ともなる。

「チューブは全体を支えるのと同時に、さまざまなエネルギーや情報を建物全体に供給する樹のような役割を果たしているのです*19」と表現されている通り、チューブが建物の構造的な基本となっている。

また建物の外壁を「スキン」（皮膚）と呼んでいる。特に常禅寺通に面した外壁は2重のガラス面（ダブルスキン）でつくられ、上部の開閉機構で空調コストを軽減する機構となっている。

チューブとスキンはメディアテークの構造的な特徴であるとともに、デザインとしての個性になっており、常禅寺通からみたメディアテークは一目でわかる存在感を示している。

1. 3 メディアテークの施設内容

メディアテークは地上7階、地下2階の建物で、階ごとに異なった機能を持っている。各階の構成は次の通りである*20（メディアテークの施設内容は2008年1月31日現在の内容を記載した。2008年3月にフロアの機能の見直しを行い、リニューアルする予定である）。

7階：スタジオ

6階：ギャラリー4200

5階：ギャラリー3300

4-3階：仙台市民図書館

2階：インフォメーション

1階：プラザ

地下1階：駐車場など

地下2階：倉庫など

使用者が実際利用するのは地上フロアの部分であり、そこは機能面から大きく4つのゾーンに分けられる。公開空地としてのプラザ、市民図書館、ギャラリー、スタジオの4ゾーンである。以下、各ゾーンの概要を紹介する。（なおカギカッコ内の名称は、メディア

テークウェブサイト上での表記から引用した)

1. 3. 1 公開空地としてのプラザ

1階部分は建物内ながら公開空地*21に指定されている。ここには「オープンスクエア」があり、演奏、講演、上映などが行われるスペースである。一般に貸し出しされるため、さまざまな活動に使われる。

またフロア内にはショップ、カフェがあり、来館者が楽しめる空間を提供している。

1. 3. 2 市民図書館

3, 4階は「市民図書館」となっている。また、2階はメディアテークの総合インフォメーションと合わせ、児童書、雑誌とインターネットの閲覧ができるスペースとなっている。

1. 3. 3 ギャラリー

5階、6階はギャラリーゾーンとなっている。両方とも一般に貸し出しをされている。5階は天井高3.3メートル、広さ970平方メートルの「ギャラリー3300」。固定壁面にて区切ることが可能なギャラリースペース。最大限6つのスペースに分割して使用できる。

また、6階は天井高4.2メートル、広さ1,095平方メートルの「ギャラリー4200」。幅およそ4メートルの可動パネルで仕切ることで自由な空間構成が可能なスペース。2分割しての使用もできる。ここは一般に貸し出されるのと合わせて、メディアテークの自主企画の会場となることもある。

1. 3. 4 スタジオ

7階は映像ライブラリーと、情報の編集や創造活動の場所となっている。ここは大きく分けて3つのゾーンからなる。まず、35ミリフィルムなどの映画も上映できる「シアター」。次にビデオ、DVDなど映像ソフトをみることが出来る「映像音響ライブラリー」。美術専門図書資料の閲覧ができる「美術文化ライブラリー」。それ以外に音楽、映像などの編集ができる貸し出し方式の「スタジオ」がある。

以上がメディアテークの施設概要である。この施設での活動内容は第4章にて検証する。

次章では、メディアテークの設立経緯を検証するための基礎的な事柄を明確にするため、仙台市を経済と文化の面から概観する。

第2章 仙台市の位置－民力と文化施設の点から

2. 1 東北地方における仙台の優位性

慶長5年（1600年）伊達政宗が千代（せんだい）を仙台と改め居城としたことから、仙台の歴史は始まる。以来400年仙台は発展を遂げてきた。宮城県の県庁所在地であり、仙台市の人口は1,029,595人^{*22}で、東北地方^{*23}唯一の百万都市である。1989年4月には政令指定都市になっており、これも東北地方では唯一である。

人口の多さでは東北地方でトップの位置にいる仙台だが、経済面、文化面などを含めて判断すると、どの程度のレベルに位置するのだろうか。ここで『民力^{*24}』のデータを使って、仙台市の「力」を調べる。民力は、

「『民力とは、生産・消費・文化・暮らしなどの分野にわたって国民が持っているエネルギーである』と定義されている^{*25}」

とされるデータである。『民力』には多くのデータが掲載されているが、ここでは民力のもっとも基本のデータである民力総合指数^{*26}を参照する。民力総合指数は全国を100,000とした各地域別の構成比であり、市町村別の指数が示されている。

東北地方の主要都市^{*27}の民力をまとめたのが図表1である。仙台はどの都市より圧倒的に大きな民力総合指数を持っていることがわかる。民力総合指数というひとつの指標評価では、東北地方での仙台の優位性が明確に示されている。

次に、仙台市での美術振興状況を他の政令指定都市と比べ概観する。

2. 2 政令指定都市における美術振興状況

現在、政令指定都市は全国で17ある。この中には「平成の大合併^{*28}」により複数の自治体が合併し、新たに政令指定都市となった5市が含まれる^{*29}。本研究では1980年代からのメディアテーク設立の経緯を追っていることから（詳細は第3章にて述べる）、2000年代に新たに政令指定都市となった自治体は、比較の対象から除外する。そうすると、1900年代に政令指定都市の指定を受けた市としては仙台市を含め12となる。

この12政令指定都市で、美術振興の状況を概観してみよう。まず、市立美術館の設立状況を調べてみると、市立美術館を設立していないのは仙台市だけである図表2。この中には例えば神戸市の「小磯記念美術館」「神戸ファッション美術館」のように特定の作家やカテゴリーに特化した美術館もあるが、どの市も1館は美術館を持っている。さらに、札幌市、大阪市、神戸市、福岡市は複数の美術館を所有している。

また、市民ギャラリーの所有、運営を調べてみても図表3、すべての政令指定都市で、住民に貸し出しを行う市民ギャラリーを所有している。仙台市ではメディアテーク内のギャラリーが市民ギャラリーにあたる。

このように美術館、市民ギャラリーといった美術施設整備としての点でみると、仙台市は他の自治体より進んでいるとは言い難い。次に仙台市の文化芸術振興の基本姿勢と、文化施設の整備状況を調べる。

2. 3 仙台市の文化芸術振興の基本姿勢と文化施設整備状況

まず、市民がアクセスする機会が多い仙台市の公式ウェブサイトで、文化芸術振興がどう表されているかを調べてみる。ウェブサイトのトップページから「文化・スポーツ・市民活動」に入り、そこにある「文化事業」から「仙台市の文化振興」に行く。このコンテンツが芸術文化振興の基本内容を掲載したサイトと判断できる。

ここに掲載されている項目は4つと「リンク*30」がある。4つの項目は「劇都仙台」（演劇プロデュース公演、戯曲賞などの情報を掲載）「仙台ジュニアオーケストラ」（ジュニアオーケストラの活動内容、演奏会のご案内など）「ギャラリーホール」（市役所1Fギャラリーでの展示内容紹介）「募集情報・お知らせ等」（助成事業や各種イベントの申込み情報のお知らせなど）である。

理由や事情はともかく、市民がまずはアクセスする公式ウェブサイト上での「文化振興」がこの4項目だけなのは、文化芸術振興への姿勢として寂しさを感じざるを得ない。もちろん「リンク」にある「仙台市民文化事業団*31」のウェブサイトへ入れば、文化芸術に関わるコンテンツは掲載されている。しかし、まず閲覧するであろう市のウェブサイトの内容充実を目指すべきではないだろうか。

また、上にあげた4つの項目にある「劇都仙台」に触れておく。仙台市では演劇を「劇都仙台」、またクラシック音楽を「楽都仙台」というキャッチフレーズを用いて振興活動を行っている。ウェブサイトの項目からはクラシック、演劇の振興が中心とも受け取れる。絵画、工芸、彫刻などの美術振興は、軽んじられているのだろうか。

ここで他の政令都市のうち2市の事例を取り上げ、文化芸術振興の状況を比べてみる。

まずは札幌市の場合。この市の郊外にある「芸術の森」では、工房にてクラフト、染織、陶芸、ガラス、版画などを制作できる環境を市民に提供している。仙台市には、このような市民が創作活動に使える環境は用意されていない。また、札幌市では「札幌市民芸術祭」を開催している。これは音楽・演劇・舞踊・美術・文学等の各分野で市民が公演、発

表できる芸術祭である。このような市民参加型の芸術イベントは、仙台では行われていない。

また人口は仙台市より少ないながら*32、千葉市美術館を持つ千葉市では「千葉市芸術文化新人賞」を行い、将来の活躍が期待される市ゆかりの若手芸術家を選び、表彰している。この賞では、音楽、美術、演劇の各分野から選ばれている。仙台ではすぐれた詩的業績を残した人を顕彰する「晩翠賞」はあるが、幅広い分野における芸術家への表彰制度はない。

次に、仙台市における文化施設の整備状況を概観しておく。図表4は仙台市の文化施設の一覧である*33。この中で、仙台市青年文化センターはクラシック音楽専用のコンサートホール*34、イズミティ21はコンサートやオペラ、バレエなど幅広いジャンルの大型公演対応の大ホールを含む施設*35であり、クラシック音楽用途の施設は充実している。

また、生涯学習の基本的な施設である博物館、科学館も整備されており、美術館がないのが不思議なくらい多くの施設が整備されている印象を受ける。

仙台市ではどうしてこのような状況に至ったのか。次章ではメディアテークの設立経緯を追うことによって、この状況に至った要因を検証していく。なお、仙台市における現在の文化芸術振興に対する施策の問題点は、第4章にて検証する。

第3章 せんだいメディアテーク設立の経緯

3. 1 設立経緯検証の対象とする時期について

この第3章では、本研究の重要な部分と考えるメディアテークが設立された経緯を調べていくこととする。ここでメディアテークの設立経緯を検証していくには、その始まりを特定しなければいけない。メディアテークの開館は2001年1月26日。これは明確である。しかし、メディアテークとなるべき施設を、どの時期から構想しはじめたのか。これは、現在では明確には特定できない面もある。しかし研究を進める上では、ある時期を基準点と定める必要がある。

そこで本研究では、ひとつの公式なデータを基準点とすることとする。具体的には、メディアテークウェブサイト内の「メディアテークについて」にある「開館までの歩み」というコンテンツを参照する*36。ここにある最初の記述は「1989年8月 県芸術協会が大型ギャラリーを中心とした美術館建設の陳情書を提出」で始まっている。これが仙台市がメディアテークを設立しようとした「原点」と判断できる。本研究ではこの1989年8月をメディアテーク設立構想の開始点として、以下の論を進めていくこととする。

3. 2 メディアテークに関わった市長たち

3. 2. 1 ゼネコン汚職と石井亨

まず、メディアテークが計画されてから完成し、現在に至るまでの時期に仙台市の市長をつとめていたもしくは現在つとめている方の業績、活動を整理することから始める。これは、仙台市の公共施設であるメディアテークの設立経緯を考察していく上で、市長が「何をしたか」は重要な要因であると考えからである。

先に述べたようにメディアテーク設立の始点は1989年8月。ここから現在までの期間の仙台市長は、年代順に石井亨（いしいとおる）、藤井黎（ふじいはじめ）、梅原克彦（うめはらかつひこ）の3人。

まず、1989年8月の時点で市長の職にあったのは石井亨である。石井は、1984年12月に第26代の仙台市長となった。しかし、1993年6月ゼネコン汚職で逮捕され、その市長生命を終えることになる。

簡単に、市長になるまでの経歴を辿っておく。石井は1925年に北海道に生まれる。旧制第一高等学校を経て、1950年東京大学法学部を卒業し、旧自治省（現総務省）に入省

する。山梨県企画課長、千葉県労政課長などを経て、1961年自治省振興課長補佐。1963年に宮城県庁入りし、総務部次長兼財政課長、商工労働部長、総務部長などを歴任後、1974年副知事に就任する。そして、1984年当時の仙台市長・島野武が急死したことから、市長選に立候補し、当選する*37。

石井は3期9年弱その職にあった。その市政で特に注目しておきたいのは、1989年仙台市を政令指定都市にしたことである。1987年宮城町、1988年泉市、秋保町と周辺の市町を吸収合併し、仙台市の人口は89万6千人となる*38。この結果、政令指定都市として十分な資格を持つことになり、翌1989年指定を受ける。

ここで、ひとつの重要な時代的背景として考慮しておかなければいけないのが、石井が市長をつとめた時期がバブル景気の期間*39にあたるということである。石井市政の基本は、バブル景気にのった「箱物行政」であった。つまり公共施設の建設そのものが目的化し、過大とも思える公共投資が行われた。

石井が市長であった期間につくられた主な公共施設は「仙台市博物館（新館）」（1986）「新科学館」（1990）「こども宇宙館」（1990）「国際センター」（1991）「仙台サンプラザ」（1991）など数多い*40。また、1987年には仙台市初となる地下鉄・南北線が開通している。もちろんメディアテークも、石井の時代に計画されて、かなり具体的なものになろうとしていた。

この時期につくられた公共施設は、石井の前任である島野の時代から計画されたものもあるであろう。しかし、実際に公共工事としてゼネコンに発注し、工事を進めるのは石井が長をつとめた時期の仙台市である。かくて石井は公共工事の談合に関わるようになり、1993年6月29日東京地検により収賄容疑で逮捕される。いわゆる「ゼネコン汚職事件*41」である。石井に続き、宮城県知事である本間俊太郎も1993年10月に逮捕され、この公共工事をめぐる事件は、宮城県、仙台市を大きく揺るがすこととなる。

石井は1993年7月3日、任期途中で市長を辞任する。その後任には藤井黎が就くことになる。

3. 2. 2 堅実な市政を行った藤井黎

石井亨市長の辞任に伴う市長選で選ばれたのは藤井黎である。藤井の経歴をみておこう。1930年生まれ。東北大学経済学部を卒業後、地元の新聞社・河北新報社勤務後、東北大学大学院修了、1957年仙台市役所に入庁する。企画局次長、教育長、教育委員長などを経て、財団法人仙台市文化事業団理事長をつとめる。そして1993年8月仙台市長選に立

候補し当選する。市長として3期12年（1993年8月～2005年8月）をつとめる*42。

経歴をみればわかるように、藤井は市役所の職員として、長年行政に携わった人である。ゼネコン汚職による前市長の石井亨の逮捕、辞任の後、市長の職に就いた藤井だが、市長としての市政は堅実だったようで、3期の就任期間を無事つとめあげている。

石井の時代に計画されたメディアテーク建設事業だが、藤井市政のもとでも計画は進められ、開館する。さらにメディアテーク開館後、石井は約4年半市長の職にあった。メディアテークの施設計画立案から建設、そして運営において、仙台市の首長である藤井は最終責任者である。メディアテークが成功していないとすれば、その最終的な責任は藤井が負わねばならない。この時期におけるメディアテーク設立に対する市の施策については、次節で詳しく検証していく。

藤井の次に市長となったのが梅原克彦である。

3. 2. 3 生涯学習の施策で論議を呼ぶ梅原市政

2005年8月の仙台市長選で当選したのが現市長の梅原克彦である。経歴を紹介する。梅原は1954年仙台生まれ。東京大学法学部卒業後、通産省（現経産省）に入省する。海外貿易開発協会アジア・太平洋地域代表兼バンコク事務所長、駐米公使を経て、2004年に経産省通商交渉官となる*43。いわゆる「キャリア官僚」である梅原は、経産省を2005年に退職し、市長選に立候補して当選する。

現在、任期の半ばを過ぎた梅原であるが、その市政の中で生涯学習に関わる施策において、いくつか市民などから批判を受けているものがある。

具体的には、石井市長時代の1990年に開館した「こども宇宙館」を2007年12月をもって閉館したこと。

また、市の男女共同参画施策の拠点施設「エル・パーク仙台」の廃止を表明。梅原市長はこの件をめぐる

「男女共同参画関連事業のプライオリティー（優先順位）は低い」

と発言していること*44。しかし「エル・パーク仙台」は市民などの批判を受け存続を決めた。

梅原市長における現在の仙台市の文化振興、芸術支援の施策については第4章で検証する。次節からは、時系列にメディアテーク設立の経緯と、開館までの議論などをみていく。

3. 3 複合施設構想ができあがるまで（1988～1993年）

3. 3. 1 まず「市民ギャラリー」と「近代文学館」の複合施設で検討される

この節ではメディアテークの施設としての基本計画が固まるまでを調べていく。メディアテークウェブサイト内コンテンツ「開館までの歩み」の記述によれば、

「1994年6月 新市民ギャラリー・青葉区図書館・映像メディアセンター・視聴覚障害者のための情報提供施設の機能を併せ持つ芸術文化施設として設計競技を行うことを決定*45」

とあり、1994年6月の時点で施設の内容が決定したと判断できる。

この「新市民ギャラリー」「青葉区図書館」「映像メディアセンター」「視聴覚障害者のための情報提供施設」の4つの機能を構成要素とする施設として計画が決まるまでは、紆余曲折があった。その経緯を以下に具体的にみていく。なお、ここで青葉区図書館と表現されている施設については、同じ「開館までの歩み」に

「1992年9月 新市民ギャラリーを青葉区図書館（市民図書館）との併設にする方針を決定」（傍点筆者）

とされている。最終的には「市民図書館」と称される図書館施設が、この時点で「青葉区図書館」と表記されている経緯については4. 1. 4で述べる。

前章で触れたように、メディアテーク設立の始点は1989年3月に宮城県芸術協会が大型ギャラリーを中心とした美術館建設の陳情書を仙台市に提出したことである。この1989年の時点で、仙台市内における市民のためのギャラリーはどのような状況であったのか。

市立美術館を持たない仙台市にとっては、読売仙台ビル*46内にある「仙台市民ギャラリー」が市民のための美術展示スペースであった。読売仙台ビルに入居していたのはスーパーマーケットのダイエーで、この1フロアを仙台市が借り受け、仙台市民ギャラリーとして1975年に開設された*47。展示に使えるスペースはビル内の1フロアだけであり*48、加えてこの時点では、フロアの賃貸契約は1995年が期限という事情を抱えていた*49。

ここで、宮城県芸術協会が陳情に至った経緯を整理しておく。

まず、宮城県芸術協会（以下芸術協会と略）とはどのような団体なのか。正式には「社団法人宮城県芸術協会」という名称であり、絵画、彫塑、工芸、書道、華道、音楽、演劇、文芸、舞踏、茶道、写真の芸術各分野の創作者が会員となる団体である。毎年会員の作品や公演などを発表する催しである「宮城県芸術祭」を開催している*50。

1989年の陳情に至る事情を理解するためには、1981年11月、宮城県立の宮城県美術館

の開館に遡る必要がある。芸術協会は宮城県芸術祭を開催するスペースの実現のため、募金活動を行い、宮城県に県立美術館開館の陳情を行う。

この芸術協会の活動に加え、折からの県立美術館ブームなどいくつかの要因があり、宮城県は宮城県美術館を設立する。宮城県美術館には企画展示室、常設展示室と合わせて「県民ギャラリー*51」がつくられた。この県民ギャラリーは県民が美術作品などの展示に使えるスペースである。

芸術協会は宮城県美術館開館のための募金と陳情を行った経緯から、宮城県芸術祭を企画展示室で開催したい意向であった。しかし美術館側は企画展示室での団体展の開催はしない方針を示す。芸術協会は反発したが方針は変わらず、結果として宮城県芸術祭は、芸術協会の要望にとって十分でないスペースの県民ギャラリーで開催されることになる*52。

かくして、宮城県美術館で宮城県芸術祭の十分な展示スペースが確保できなかった事情から、芸術協会はメディアテーク設立の始点となる 1989 年の陳情に至る。「宮城県芸術協会」であるから、本来は宮城県へ展示スペース実現のための陳情となるべきだが、宮城県美術館での挫折があったため、仙台市への陳情に至ったと推測される。

折しも 1989 年 4 月仙台市は政令指定都市になり、それを契機として芸術協会は 31,165 人の署名を集め、仙台市長・石井亨に陳情書を提出する*53。陳情の内容は『せんだいメディアテーク建設事業の歩み*54』にこう記されている。

「東北唯一の政令指定都市にもかかわらず、音楽ホール等に比べて美術展示施設が、大きく立ち遅れている現状を指摘し、大型ギャラリーを併設した市立美術館の建設を訴えるものであった*55」

陳情の内容は「大型ギャラリーを併設した市立美術館」ではあるが、芸術協会の真意は、大型ギャラリーの実現であることは、これまで述べた経緯から容易に推測できる。

しかし、この陳情がすぐに仙台市で具体的なものとして検討されたわけではない。当時、建設が具体的に検討されていたのは「近代文学館」（以下「文学館」と略）である。1989 年 8 月に、宮城県と仙台市が共同で設置した文学館構想策定協議会から、県と市に専門性、公開制をもつ総合文学館を建てるべきだという答申が出される。そして、この文学館については、仙台市が主体になって取り組むとの協議がなされている*56。そして、1990 年度の予算で調査費 730 万円が計上されて、建設に向けて進み始める*57。

一方、市民ギャラリーはどう検討されていったのだろうか。1990 年の議会で「仙台芸術センター*58」建設について、池田友信議員（民社）から質問を受け、その場所として

「広瀬バスプール」（現メディアテークがある場所）を候補として指摘された石井市長は、仙台市民ギャラリーが利用に不便だということに触れた上で、

「こういうものはやはり町の中心部と言うか、便利な場所につくらなければいけませんので、先ほどお話のあった広瀬のバスプールも、その一つの候補地になろうかと思えます*59」と答え、ここで市民ギャラリーの必要性を認め、あわせて設立場所も具体的になった。

文学館については 1991 年予算にも建設関連経費 1000 万余円が計上される*60。石井市長も 1991 年 9 月の市議会で、文学館の建設計画について問われたのに対し、

「文学館につきましては立地条件の選定が急務でございます、早急に行いたい*61」

と答弁しており、文学館を建設することは決定事項であることがわかる。

一方、新しい市民ギャラリー設立が具体化するのには、1992 年になってからである。議会で明確にされるのはこの年の 2 月議会でのこと。

「近代文学館、新市民ギャラリー、美術館などの建設のための調査などが進められるようですが、今後の計画がどのようになっているのか、お伺いをいたします」

との磯村豊和議員（自民）の質問に、石井市長は

「近代文学館、市民ギャラリー並びに美術館についての御質問でございますが、近代文学館及び市民ギャラリーにつきましては、定禅寺通の市バス車庫跡地（現メディアテークがある場所）に建設の予定でございます*62」

と答えている。この時点で、「市民ギャラリー」と「文学館」が、同じ施設に收容される計画がほぼ決定した事項として、仙台市側から示される。

ところが、その後状況が変わっていく。

3. 3. 2 「市民ギャラリー」と「市民図書館」の組み合わせに決定

17 ページでも触れたように、メディアテークウェブサイト内「開館までの歩み」には「1992 年 9 月 新市民ギャラリーを青葉区図書館（市民図書館）との併設にする方針を決定」

とある。市議会議事録には、市民図書館を市民ギャラリーと文学館と同じ建物へ入れることの是非に関する討議は見あたらない。ここで指摘されている市民図書館とは 1992 年 9 月当時、市内青葉区の西公園内にあった。1963 年開館のため老朽化しており、現地での建て替えか、移転新築をするかが必要であった。1992 年 9 月の時点で、新しい施設を現メディアテークの場所に建設し、そこに市民図書館が移設されることが仙台市側で決定さ

れた。

そして、いったんは市民ギャラリーと文学館とも新施設に収まる計画で決まったようだが、これが覆ったとわかるのが、同月の議会での答弁。加藤栄一議員（自民）は、市が同年 3 月に青葉区北根の徳陽シティ銀行の研修所跡地*63を買収したことを指摘し、その場所こそ文学館の設立場所にふさわしいのでは、と質問する。これに対し、石井市長は「文学館の設置場所としては、より適しているのではないかと、こういうことから現在検討をさせておるところでございますが、改めてその方向で計画を進めることにいたしたい*64」

と答弁し、文学館を市民ギャラリーとは切り離し、別の建物として建設する方向であることを示す。

さらに、1992 年 12 月議会で石井市長は、
「市民ギャラリーの規模、内容、機能等につきましては、現在、新市民ギャラリー建設検討委員会を設置をいたしまして、審議をしていただいておりますが、文学館を台原の方（上記、仙台市青葉区北根の徳陽シティ銀行の研修所跡地）へ持って行くようにしようと、こういうふうを考えております*65」（傍点筆者）

と答え、この時点で、新施設には「市民ギャラリー」と「市民図書館」が入ることと、文学館は市民ギャラリーとは別な場所に建設されることがほぼ決定したと判断される。

なお文学館は「仙台文学館」として、メディアテークに先立ち 1999 年に開館する。

石井市長の答弁にある「新市民ギャラリー建設検討委員会」とはどのような組織なのか。次項では、この新市民ギャラリー建設検討委員会の活動と市立美術館構想について検証する。

3. 3. 3 新市民ギャラリー建設検討委員会の基本構想と市立美術館の棚上げ

時は前後するが、新市民ギャラリーを建設する方針が決まったのを受け*66、1992 年 6 月に仙台市は新市民ギャラリー建設検討委員会を設置する。委員会は、財団法人仙台市民ギャラリー理事長の宮城正俊*67を委員長に、学者や陶芸家、マスコミ関係者ら 10 人で構成された*68。ここで委員長をつとめる宮城正俊は、財団法人仙台市民ギャラリー設立時からギャラリー閉館までの 25 年間すべて理事長をつとめ、仙台市民ギャラリーでは大きな影響力を持ったと思われる人物である。

翌 1993 年 3 月、委員会は仙台市教育委員会に対し基本構想報告書を提出する。この報告書では、

「全国規模の巡回展が可能な面積の広い施設条件の整った大・小のギャラリーの建設（総展示面積 2,500 m²以上）、将来の市立美術館の建設を前提とした作品収蔵庫の設置、美術展鑑賞機会の充実、啓発事業の充実等*69」

との内容が骨子として盛り込まれる。

基本構想報告書には、将来の市立美術館の建設が触れられている。繰り返しになるが、1989年の芸術協会の陳情も、「大型ギャラリーを併設した市立美術館の建設」であった。仙台市では美術館設立の構想は持たなかったのか。

結論から先に言ってしまうと、メディアテーク設立が決まった段階で、美術館設立は事実上棚上げになってしまう。このことを市議会議事録でみてみよう。

メディアテークの設計者が伊東豊雄に決まり、建築が具体的になった時期の1996年10月議会（決算等特別審議委員会）で美術館問題が取り上げられる。柳橋邦彦（自民）委員が仙台にゆかりのある作家を集めて「近代美術館」を構想してはどうかと藤井市長に問うた。これに対して藤井は、

「やはり市立の美術館と言うのは将来必ず必要になってくると思いますので、そういうこれからの推移、またこれからの仙台が個性的な美術館とするためにはどのようなコンセプトでこれをつくり上げていくか、こういったあたりの十分な検討を踏まえながら検討していきたい*70」

と、検討するにとどめる答弁をする。

そして、美術館構想が棚上げになっていることを明確に示すのが、2003年3月の議会（予算等審査特別委員会）での、池田友信委員（民社）と市側のやりとり。池田が1989年の県芸術協会の陳情を持ち出し、美術館はどのような検討をされているのかと問うた。これに対し教育長は、

「（市立美術館については）長期的な課題として今までとらえてございました。これからもこの課題につきましては、早急に建設するということにはなかなかいかないのではないかと認識いたしているところでございます*71」

と、すぐには美術館が建設できないことがはっきりと示された。政令指定都市ながら、仙台は市立美術館がないままになってしまうのか。

次節ではメディアテークの仕様の決定と、設計者が伊東豊雄に決まるまでの過程をみる。

3. 4 設計競技の実施（1994～1995年）

3. 4. 1 メディアテークの仕様はどのように決まったか

前節までで、新施設つまりメディアテークを構成する要素がどのような経緯で決まったかをみた。この経緯を整理すると、「市民ギャラリー」と「市民図書館」がそれぞれの事情で移設もしくは新築することが必要となっていた。そこに、市の中心部である定禅寺通沿いに、市バス車庫だった土地が空く。仙台市はここに施設を建設し、市民ギャラリーと市民図書館の2つの機能を入れることが解決策であるとの判断をくださす。

つまり、最初になんらかの総合的な構想があつて施設を計画していったわけではなく、要求される要素（機能）を施設に入れ込んでいった、と考えていい。いいかえれば、仙台市側の要求に基づいて、メディアテークの仕様は決定されたわけだ。最終的には3. 3. 1で記した「新市民ギャラリー・青葉区図書館・映像メディアセンター・視聴覚障害者のための情報提供施設の機能を併せ持つ芸術文化施設」がメディアテークの仕様（施設の内容）として決まる。

この内容がどのような経緯で決められたのかは明らかではない。議会の議事録をみても、この時期、1992年11月以降1994年9月まで、メディアテークに関する討議はなされておらず、その真実は明らかではない。

次に、施設に「メディアテーク」という名称がつけられる経緯を検証する。

3. 4. 2 メディアテーク名称決定の経緯

施設の内容が決まったのを受け、仙台市はメディアテークの建物の設計を行うにあたり、公募による公開設計競技で設計者を選ぶ方法を選択した。設計競技は「（仮称）せんだいメディアテーク設計競技」と名付けられた。メディアテークの意味はすでに述べたように「メディアを納める棚」である。設計競技の過程を検証する前に、このメディアテークという名称が、施設に与えられた経緯を整理する。

この経緯を追っていく中でのキーワードは、「メディア」である。どこで、メディアという概念が登場したのか。メディアテークウェブサイト「（仮称）せんだいメディアテーク設計競技からの報告」と題された文章がある。筆者は仙台市教育委員会生涯学習課佐藤泰（肩書きは当時のもの）。このコンテンツは『公共建築』NO.152（1997年）に掲載されたものをウェブに転載したものである。佐藤泰は1999年メディアテーク準備室発足時から室長をつとめ、メディアテーク開館後は企画・活動支援室長に就く。2007年4月からは副館長をつとめている。メディアテーク設立、運営における仙台市側でのキーパーソンと言っている人物である。佐藤は以下の通り記している。

「市民ギャラリー、青葉区図書館、視聴覚教材センター等の既存施設と、視聴覚障害者のための情報提供施設を含めた複合施設を、仙台のシンボルロード定禅寺通りに面した敷地に建設すると言うのが、平成6年4月の段階で我々に与えられた基本的な命題であった。我々はまずこのプロジェクトに、単なる複合施設を越えた、仙台の新しいシンボルにふさわしい施設コンセプトをもたらすことが必要であると考えた。1ヶ月間の検討の結果、これら4つの施設機能を縦軸として生かしつつ、それを横断する展示機能、情報機能、創造機能を横軸にして整理しなおし、さらに全体を貫くコンセプトとしてメディアを置くことで、まったく新しい一体的な施設としようとの構想を立てることになった。」

この文章からは、4つの施設を「メディア」という概念で一体化しようと考えたのは、佐藤を中心とした市のスタッフであると読み取れる。

さらに佐藤はこう続ける。

「この施設コンセプトを設計競技にかけるにあたり、我々は市民ギャラリー構想や定禅寺通りまちつく計画に関わってきた東北大学建築学科の菅野實助教授（当時）および同研究室の小野田泰明氏に協力を依頼した。かくして設計競技の応募要領案の作成と、審査委員の選定作業が開始された」

佐藤はメディアテークの構想を、なぜか建築の専門家へと持ちこむ。かくして、設計競技の実施のための実務作業が菅野實助教授を中心に進められることになる。ここで小野田泰明が市の要望を6つに課題を整理する。これが序論で述べた6つの課題が整理される経緯である。そこで佐藤は施設の構想について、

「小野田泰明氏から、施設の機能をアートとメディアという2つの観点から再編成し、かつこれらを動的につなぐものとしてワークショップという機能を組み込んでどうかという示唆を得た*72」

といい、設計競技の実施に向け施設の構想がつくられていく。

一方、審査委員の選定については佐藤と菅野實らが協議し、審査委員長を建築家の磯崎新に依頼する。審査委員長を受けるにあたり、磯崎は、「メディアテーク」という言葉と概念を持ち出す。『せんだいメディアテーク建設事業の歩み』にこうある。

「この4つの機能を持つ施設を単純な複合施設としてとらえるのではなく、メディアの時代における新しい建築のあり方を探るという意味をこめて『メディアテーク』という総合名称を採用してはどうかという提案である*73」

かくして設計競技はすでに述べたように、「（仮称）せんだいメディアテーク設計競

技」という名称で行われることになる。

メディアテークが名称として使われる経緯は、議会でのやりとりが分かりやすいので、以下に引用する。1994年9月の議会（市民教育委員会）での審議。管間進委員（無所属）はメディアテークが磯崎の提案であることに触れた上で、

「仮称せんだいメディアテークですから、名称の決定はどういうふうにするのか、ここまでするわけですから、その前のアイディアについても募集しているわけですから、名称について市民に対して広く募集するつもりはないのかどうか*74」

と問うた。これに対し教育長は、

「名称でございますが、実は審査委員会の委員長を引き受けてくださいました磯崎新氏と事務局との打ち合わせの中から、どうしても新市民ギャラリー等建設事業と言うのでは意欲のある建築設計を全国から呼び集めるにはちょっと魅力のある名前ではないという御指摘がありまして（中略）より水準の高い建築作品が寄せられることを期待しまして、委員会の名称と設計の呼びかけにこの名前を使っていくということにいたしました*75」

と答えた上で、

「必ずしも、これが施設の名称になるということではございません*76」

と明言している。

しかし、その後名称の公募は行われことはなく、せんだいメディアテークは正式な施設名称として決められる。せんだいメディアテークという名称が新施設にふさわしいかどうか議論されたのだろうか。これは施設内容の決定過程と同様、明らかでない。

せんだいメディアテークが、いつ正式名称に決まったのか。メディアテークウェブサイト内「開館までの歩み」にも記載されていない。「せんだいメディアテーク条例*77」が制定されている2000年3月までには、正式名称として決定したと推測される。

次項では、メディアテークの設計競技がどのように行われたかをみていく。

3. 4. 3 設計競技の実際

設計競技は、1994年9月から1995年3月までかけて行われ、最優秀者が決まるまで半年以上かかるスケジュールとなった。競技の審査委員は、次の5人。（役職は当時のもの。以下専門委員も同じ）

委員長：磯崎新（磯崎アトリエ代表）、副委員長：山口勝弘（筑波大学芸術系名誉教授・神戸芸術工科大学教授）、委員：月尾嘉男（東京大学産業機械工学科教授）・藤森照

信（東京大学生産技術研究所助教授）・菅野實（東北大学建築学科助教授）

また、設計競技の運営にあたり、主催者は3人に専門委員を委嘱した。

澤井清（宮城女学院女子大教授）・新田秀樹（宮城教育大学助教授）・小野田泰明（東北大学建築学科助手）の3人。

設計競技の選考は、以下の方法で行われた。

①応募：参加希望者は応募登録をした後、応募設計図書（応募作品）を提出する。提出された応募書類は235作品であった。

②応募作品の公開：応募全作品が市民に公開された*78。

③審査：審査委員により作品の審査を行った。第1次から第7次までの選考を行った。第2次審査で23点まで絞り込み、第3次から第6次までの選考で9点に絞った。この残った9点を佳作とした。第7次審査で3点の優秀作を選んだ。

④入賞作品の公開：第2次選考で選ばれた23点を公開した*79。

第7次審査まではすべて応募図書による審査である。なお、上記の通りすべての応募作品と第2次選考で選ばれた作品は公開されたが、それをもとにした市民意見を反映できる機会はなかった。

⑤最終審査（第7次選考）：優秀作3点に対し、その設計者へのインタビュー*80を審査委員が行った。それを踏まえ協議を行い、最優秀作を決定した。

1995年3月22日の最終審査で、審査委員討議の結果、優秀作3点の中から伊東豊雄建築設計事務所と古谷誠章*81の2作品に絞られる。最終的には審査委員の多数決で、伊東豊雄の作品が最優秀作に選ばれる。伊東案が選ばれたことへの磯崎のコメントを紹介する。「最終的には伊東豊雄さんの案が選ばれた訳ですが、この過程で我々としましてはメディアを新しく解決していく点について、また様々な問題を、解決して欲しい問題が残された案だと考えました。できればそういう点を、今後市の方々と一緒に協力しながら、さらにこのコンセプトに基づいて新しい建築に形にまとめ上げていただきたいというように考えました。そういう条件を付けてご推薦する最終案にしたいという様に意見がまとまりました*82」

伊東案には、「メディア」についての解決案が十分でなく、課題として残されたということである。そしてその課題を仙台市と協力しながら解決していくことが、設計競技の審査員会から求められた。この審査員会の指摘を踏まえ、この後様々な議論が展開されることになる。

3. 5 開館までに行われた様々な議論 (1995～2001 年)

3. 5. 1 プロジェクト検討委員会の発足

メディアテークの設計者が伊東に決まり、基本設計、実施設計が行われようとする時期に、仙台市はメディアテークに対する構想をつくり上げようと、いくつかの活動を行った。

まず、「プロジェクト検討委員会」がつけられた。これは、

「『(仮称) せんだいメディアテークプロジェクト検討委員会』の目的は、建築計画採用決定以降に事業者*83によって作成された『事業計画素案』の内容検討、委員会の開催と同時並行的に進められる「建築基本設計計画」への助言、「メディアテーク概念」の検討である*84」

という目的の委員会である。委員会のメンバーは以下の通り。

【委員 (座長)】菅野實 東北大学教授 (建築、地域計画・設計競技審査委員)

【委員】多木浩二 評論家／藤幡正樹 慶應義塾大学助教授 (グラフィックデザイン)／鈴木敏恵 横浜建築研究所教育システム部長 (文部省生涯学習クリエイティブ・アドバイザー)／桂英史 東京造形大学 (図書館学・情報学)

【専門委員】澤井清 宮城学院大学教授 (図書館学)／新田秀樹 宮城教育大学助教授 (美術、博物館学)／小野田泰明 東北大学専任講師 (建築計画学)

【コーディネーター】鈴木明 (建築・都市ワークショップ)

委員会が最初に開催されたのは 1995 年 8 月 28 日。当時の『河北新報』の記事には、「メディアテークの事業内容や設計上の課題について討議した*85」とあり、また「今後、検討委は四回程度開かれ、1 月末までに提言をまとめる予定*86」

とあったが、実際に委員会の報告書が出されたのは、1996 年 5 月である*87。その内容は「提言」と「検討委員会討議結果報告」から構成されている*88。

まず「提言」では、3 項目を実施するよう示している。

1. 「せんだいメディアテーク」準備室の早期開設
2. プロジェクトチームの発足
3. プレ・イベント開催

この3つの提言については、その後実行に移されている。

報告書の本論とも言うべきは「検討委員会討議結果報告」で、内容は多岐に及ぶ。メディアテーク概念の検討、事業計画の策定指針、運営・組織についての試案、そして建築計画に対する検討と結果、がその内容である。読み込んでみると、かなり理念的な記述が含まれている印象を受ける。このことは、報告書でも認められている。報告書の冒頭部部分にある「背景」には、まず、

「(仮称) せんだいメディアテーク建設構想は、かねてから建設の要望があった市民ギャラリー、市民図書館などの機能を「メディアテーク」の名の下に一体化し、単なる複合施設にとどまらない21世紀にふさわしい生涯学習推進の市民施設を建設するものである。

*89」と前置きした上で、

「しかしながら現在までのところ、この施設がどのような活動を行い、市民がどう利用するかといった具体的なイメージについて、市民と事業推進者間で合意が取れているとは言えない。市民ギャラリー、市民図書館といった従来からのサービス概念を統合し、それに余りあるメディアテークならではの活動・利用と意義について、双方が魅力を感じるイメージをいまだに持ち得ていないのである*90」

とする。そして、これに続けて、

「そのことの要因として、本事業がメディアテークとして「基本構想」を持たず、さまざまな事業(建築設計コンペ、各種市民懇談会等など)を先行してきた経緯があげられる

*91」(傍点筆者)

と、本論ですでに指摘していた事実を、委員会でも認識していたことがわかる。ここで「各種市民懇話会等」とされているのは、設計競技にて伊東豊雄案が選ばれたのを受け、市民からの意見を聞くための懇談会や芸術協会との打ち合わせなどを指している。この内容については、3. 5. 3で触れる。

そして「経過」の項目では、

「『事業計画素案の検討』については、複合した施設の運営・活動範囲の検討、施設サービス概念の調整・了解等など未解決な諸問題が密接に結び付いており、また一般解としてのメディアテークではなく、仙台固有の市民生涯学習施設としての希求が審議の過程で事業者、市民団体など*92の間で高まるなど、前提条件へのフィードバックも含めて協議検討の相当部分を費やしたが、現段階での具体化・確定は困難との結論に達した*93」(傍点筆者)

とあり、具体論の提言を放棄している。

このように、プロジェクト検討委員会では3つの提言を除いては、メディアテークの構想を具体化していく案の提示を行うことができなかった。

次に、報告書で提言された「プロジェクトチームの発足」について概観する。

3. 5. 2 プロジェクトチームの発足

「プロジェクト検討委員会報告」を受け 1996 年に「プロジェクトチーム」がつくられる。このプロジェクトチームはメディアテークウェブサイトには、「プロジェクトチーム'96」と「プロジェクトチーム'97」の記録がある。まず、1996 年のプロジェクトチームをみってみる。その目的は

「メディアテークにおいて展開しうる市民活動や研究開発活動*94の内容についての実際的な検討を、具体的な活動のシミュレーションを通じて進めるとともに、メディアテークプロジェクトにおけるさまざまな活動のインキュベーター的役割を担うものとする*95」

と意欲的なものとなっている。そのメンバーは、

浜野保樹 放送教育開発センター助教授（メディア論）／桂英史 東京造形大学助教授／北野宏明 ソニーコンピューターサイエンス研究所／岩本正敏 東北学院大学工学部助教授／木村健一 国立宮城高等工業専門学校情報デザイン学科／新田秀樹 宮城教育大学助教授・美術館学／菊地淳 針生印刷（メディアコーディネーター）

となっている（肩書きは当時のもの）。事務局を仙台市生涯学習課・伊東豊雄建築設計事務所・仙台ソフトウェアセンターがつとめている。

このプロジェクトチーム'96 の活動内容・結果はメディアテークウェブサイトには概略のみが記載されている。しかし、翌年のプロジェクトチーム'97 は議事録が公開されていて、その活動内容を知ることができる。プロジェクトチーム'97 は 96 年度のメンバーに関口敦仁（当時岐阜県立国際情報科学芸術アカデミー教授）と小野田泰明（当時東北大学工学部助教授・建築計画学）が加わり構成されている。

97 年度のプロジェクトチームでは、計 7 回のミーティングが行われた。そのうちの 4 回は伊東が参加している。議事録からは、様々な議題で討議が行われていることがわかる。例えば「バリアフリーについて」「1 階の運営とレストラン・ショップ」「建築設計以外の業務＝家具デザインなど」等施設面での内容や「情報システムの検討」といったシステム系の検討。そして「館長問題について」と館長人事まで及んでいる*96。

しかし、もっとも多い討議内容は図書館に関するものである。7 回行われたミーティン

グのうち、5回で図書館問題が議論されている。その内容をみると、図書館の運営面についてかなり突っ込んだ議論がされている。例えば、

「運営的には図書館は切り離されている。もっと図書館計画を早めて連動させるべきではないのか*97」

と言ったように、メディアテークの運営面で、図書館を含み一体化するためにはどうしたらいいか、という本質的な議論もあった。

一方、メディアテークのギャラリースペースについての議論は多くはなかった。1回だけ「ギャラリーについて」の内容で議論がされたが、それはギャラリーの電気容量や照明などの設備設計面の検討であり、ギャラリーをどう活用するか、といった議論ではなかった。

プロジェクトチームは、どのような成果をあげたのだろう。議事録から判断する限りでは、このプロジェクトチームの問題点はそのミッション（使命）が不明確であることだろう。議事録にもそのことが示されている。

- ・本当ならばシミュレーションの段階ではなく、実施計画の段階である。プロジェクトチームはどういう立場でやるのか。（中略）プロジェクトチームは正式な委嘱もなく、ボランティア的立場。ボランティアでもいいが、責任の所在が不明確。
- ・プロジェクトチームが仙台市としてオーソライズされていない。と言うことは、ソフトは事務局でやりなさいと言うこと。
- ・東京のメンバー*98も、結構フラストレーションが溜まっているように思われる。自分たちの言った意見が、「暖簾に腕押し」という感があるのでは。予算も人もわからないのでは、破綻するような気がする。

プロジェクトチームの討議内容が、どれほどメディアテークの実際的な活動に反映していたのだろうか。その結果は、少なくともメディアテークウェブサイトには示されていない。

このことから、プロジェクトチームの活動が終わった時点ではメディアテークの基本構想がつくられたとは判断できない。

3. 5. 3 宮城県芸術協会をめぐるやりとり

3. 3. 1において、1989年宮城県芸術協会（以下芸術協会）が陳情に至った経緯に触れた。メディアテーク建設が決まり、設計者に伊東豊雄が選ばれた後にも、仙台市は芸術協会との交渉、打ち合わせなどを行った。図表5は『せんだいメディアテーク建築事業

の歩み』に掲載されている「宮城県芸術協会関連説明会・打ち合わせ等」と題された資料を転記したものである*99。

1995年6月から2000年11月までに、芸術協会との打ち合わせ等は計8回にも及んでいる。その具体的な内容は明らかではない。しかし、「芸協役員市長訪問（ギャラリー階問題について）」や「宮城県芸術協会関連説明会（ギャラリー利用について）」といった記述からは、芸術協会の要望するギャラリースペースと、メディアテーク施設仕様の摺り合わせが行われたと推測することができる。

一方、市民のメディアテークへの意見を聞く場は、「メディアテークわいわいトーク」と題された懇談会が2回と、「せんだいメディアテーク利用者ヒアリング」が1回の計3回のみである。さらに、このせんだいメディアテーク利用者ヒアリングにも、芸術協会の会員が参加し、こう申し入れをしている。

「ギャラリーの建設はこれで最後になる。後で指弾を受けないように慎重に対応してもらいたい*100」（傍点筆者）

この経緯をみると、仙台市にとって、なんらかの理由から芸術協会の意向を重視しなければいけなかったと思わざるを得ないが、その真実は明らかでない。

この章の最後として、次節ではメディアテーク館長決定までの顛末について触れる。

3. 6 館長決定までの顛末とメディアテーク開館

メディアテークの館長は、その決定がかなり遅い時期にずれこんだ。仙台市は知名度のある人物を据えたいと考えていたようだ。1999年に開館した「仙台文学館」の初代館長に作家の井上ひさしを据えていることもあり、メディアテークにも著名人館長を招聘しようと思論んでいたと思われる。

館長が決まるのは、開館5ヶ月前の2000年8月18日。当時東大名誉教授の職にあった石井威望（いしいたけもち）氏を初代館長に内定した、と仙台市が発表した。

「市はメディアテークを『高度情報化社会に対応した新しいタイプの生涯学習施設』と位置づけており、情報社会論で国内の第一人者とされる石井氏を適任と判断し、就任を要請していた*101」

と新聞は報じている。しかし、この後状況が一転する。開館まで1週間と迫った2001年1月19日、石井氏は館長就任を辞退する。「公務が多忙」がその理由である*102。

仙台市は急遽、市職員OBの萩野清澄氏（当時 財団法人仙台ひと・まち交流財団理事

長) を館長にする人事を発表する。石井氏は名誉館長となる。

かくして、2001年1月26日、せんだいメディアテークは開館する。オープンに際した藤井黎仙台市長のコメントを紹介する。

「単なる情報の保存庫にはしたくない。『情報のコンビニエンスストア』の感覚で大勢の市民に利用してほしい。新しい文化・芸術の創造拠点であり、発信基地でもある*103」

藤井市長にとって、メディアテークはセブンイレブンと同じイメージだったのだろうか。

第4章 せんだいメディアテークの活動と仙台市の文化芸術振興

4. 1 メディアテークの活動

4. 1. 1 メディアテーク管理運営の実際

この章では、メディアテークの開館以来のイベントを分析し、活動結果をまとめる。そして、メディアテークの運営者である仙台市における文化芸術振興策の現状について概観する。

活動分析に入る前に、メディアテークの管理運営について整理しておく。メディアテークは仙台市により計画、設置された施設であり、所管は仙台市教育委員会生涯学習課である。開館後は、仙台市民図書館は市の運営、それ以外の施設は外部組織に委託と「2つの組織体」で動くことになる。

具体的には、メディアテークは開館時には仙台市民図書館の運営を除いては、「財団法人仙台ひと・まち交流財団」へ委託された。また、2005年度からは、仙台市が指定管理者制度を導入したのを受けて、運営の形態は委託から、財団法人仙台ひと・まち交流財団を指定管理者にする形態に変わっている。さらに2007年4月からは、財団法人仙台市市民文化事業団に指定管理者が変更されている。

財団法人仙台ひと・まち交流財団、財団法人仙台市市民文化事業団とも仙台市全額出資の外郭団体である。財団法人仙台ひと・まち交流財団は市内にある文化センター、市民センターや、戦後復興記念館*104の管理・運営を行う財団。ウェブサイトには「仙台市内のコミュニティの推進及び振興を図るため」とある。

一方、財団法人仙台市市民文化事業団は、ウェブサイト「仙台市民の芸術文化振興事業と郷土の歴史文化に関する事業を行い豊かな市民文化の創造に寄与することを目的に、さまざまな事業を行っています」とあるように、文化芸術支援を目的とする財団である。仙台文学館、仙台市青年文化センターなど文化芸術に関わる施設を管理し、文化事業に対して支援、助成、協力も行っている。

今年度（2007年）からメディアテークの指定管理者が仙台ひと・まち交流財団から仙台市市民文化事業団に変わったことは、仙台市側になんらかの意志、意向に変化があったのか。この点は、興味深い変化点である。

さて、次項ではメディアテークでの活動内容を分析する。

4. 1. 2 自主イベントの数値分析

この節ではメディアテークが開館してから開催されたイベント活動*105の分析を数値的な視点から行う。

メディアテーク各階の構成は、第1章で紹介したが（9 ページ参照）、この中でイベントに使うのは1階の「オープンスクエア」、5、6階のギャラリー（5階は「ギャラリー3300」、6階は「ギャラリー4200」）、7階の「スタジオ」である。なお「スタジオ」は機能別に複数のスペースに分かれていて、イベントに使うのは主に「スタジオ a」～「スタジオ d」と、「スタジオシアター」の計5スペースである。

これらのスペースを使った行われたイベントが、メディアテークウェブサイト内「smtアーカイブサイト」に「せんだいメディアテーク自主イベントの記録」として公開されている。現在、2001年度から2006年度までの全記録と2007年度の一部の記録がある*106。ここでまだ年度の終わっていない2007年度は除外し、2001年度から2006年度までのイベントを分析した。各イベントタイトルにはウェブサイトのデータが添付され、イベントの概要を知ることができる。これらのデータを整理し、内容を分析した（そのデータの一部が図表6である）。

まずイベントを概観し、「映画」「映像」「展示」「ワークショップ」「オープンカフェ」「シンポジウム」「ガイドツアー」のカテゴリーを設定し、分類した。ただ、これらのカテゴリーに入らないものもあり、これについては適宜内容を表すカテゴリー名を付与した。このカテゴリー分けした各イベントに「内容詳細」「開催場所」（例えば「オープンスクエア」とか）「有料イベントか否か」をメディアテークウェブサイトのデータから判断し、分類した。

対象とした「せんだいメディアテーク自主イベント」は計128。この結果をカテゴリー別に集計したのが、図表7である。（リンクがなく内容がわからないイベントや、ひとつのイベントで複数カテゴリーのイベント開催しているものもあり、合計数は128ではない）イベントでいちばん多いのが「展示」で全体の3割強で41。それに続けて「映画・映像」の34（集計では「映像」が4イベントと少ないため、「映画・映像」とまとめた）。「ワークショップ」も23イベントと多い。「展示」「映画・映像」「ワークショップ」の3つのカテゴリーで、全体の4分の3を占める。内容面からは、この3カテゴリーがメディアテーク自主イベントの基本であることがわかる。

次に、イベントの開催場所からの分析をまとめたのが図表8である。（場所の集計につ

いては、例えば「ガイドツアー」のように場所を特定できないものを除外してある) このデータをみると、7階の「シアター」と5階、6階の「ギャラリー」での開催がそれぞれ全体の3割ずつ。それに1階の「オープンスクエア」が続く。この3つの場所で、約8割のイベントが開催されている。

カテゴリーと場所での分類分析から、メディアテークの自主イベントは「ギャラリーでの展示」と「シアターでの映画、映像上映」が主たるものであることが指摘できる。

次項では、活用度が高いギャラリーの利用状況について数値分析をする。

4. 1. 3 ギャラリーでの展示企画の分析

3. 3の節でみたように、メディアテークのギャラリーはかつてあった仙台市民ギャラリー（以下市民ギャラリーと略）を受け継いでつくられたものである。市民ギャラリーは1975年9月に開館し2000年9月までちょうど四半世紀活動した*107。このギャラリーの活動を数値的に分析し、メディアテークのギャラリーでの利用状況と比較してみる。

市民ギャラリーの運営内容は、自主事業と貸館事業の2つに分けられる。自主事業には、企画事業、公募展、共催事業（文化団体との共催）の3事業がある*108。

この4つに区分された事業の事業件数と入館者*109を年度ごとにまとめたのが図表9である*110。なお、データは1975年から公開されているが、1985年以前は集計方法が異なることと（「一般会場利用者」「自主企画」「特別企画」3区分で集計）、2000年はギャラリーが9月に閉館になったことから通年のデータではないため除外し、1986年から1999年の14年分のデータを分析の対象とする。

このデータからは、ギャラリー事業の大部分は貸館事業が占めており、また貸館事業の件数、入館者数とも1990年以降はほぼ変わらない数値であることがわかる。

市民ギャラリーと比べ、メディアテークのギャラリー利用状況はどうだろうか。メディアテークのギャラリー利用件数、利用者数のデータは、現在のところ2004年度と2004年度のみしか公開されていない*111。このデータをまとめたのが図表10である。

ギャラリーの2年間の平均値は、利用件数162件、利用者241,882人。これに比べて市民ギャラリーの平均値は、利用件数70件、入館者（利用者）112,567人である。2つのデータを比べると、メディアテークが件数では約2.3倍、利用者では約2.1倍と増えている。ちなみに、市民ギャラリーの展示スペースは3室合計で459.5㎡に対し、メディアテークのギャラリーは5、6階の2フロア合計で2,065㎡。すべてを分割すると計8スペースの展示会場として使用できる。

メディアテーク展示スペースは市民ギャラリーの4倍であるが、それに比して利用件数、利用者数が、数字上はそこまでは増えてはいない。

ここで、仙台市民ギャラリーとメディアテークとも、基本的な貸出期間は1週間単位であることは変わっていないため*112、ギャラリー利用データから一件あたりの利用人数を算出してみる。ここでの一件とは、展覧会などひとつのイベントのことである。市民ギャラリーが1,608人（平均の人数は四捨五入、以下同じ）、メディアテークは1,488人とメディアテークが少ない。数値上ではひとつのイベントの利用者平均値は、市民ギャラリーが上回っている。

一方「企画事業」は市民ギャラリーの利用件数で占める割合は低い、美術館での企画展にあたるものと考えられ、この内容についても概観しておく。25年間に行われた企画事業（展覧会）の入場者数、開催期間（日数）をまとめたのが図表11で、左から、開催年度、開催された展覧会の数、開催期間（日数）、一日あたりの入場者数を集計した*113。

展覧会開催日は、1975年から1985年までは年間30日、1986年以降は15日程度と少ないが、一日あたりの入場者数はそれぞれ平均358人、287人、25年間のトータル平均は332人である。

それでは、メディアテークの企画展はどれほどの入場者を集めているのかをみてみよう。メディアテークの年報には2003年度までの「自主事業*114」での展示企画の入場者数は記述されておらず、2004年度の年報から公開されている。そこで、2004年度から2006年度の3年間に開催された有料展示企画の入場者数をまとめた。なお、2006年度は年報がまだ発行されていないため、『ひとまち交流財団 18年度事業報告*115』に記載されている数字を参照した。

企画展の入場者数、開催期間、一日あたりの入場者をまとめたのが図表12である。

2004年から2006年まで開催された7つの展覧会での、一日あたりの入場者数は平均すると162人。単純な数値の比較ではあるが、すでに示したように市民ギャラリーの企画事業において一日あたりのトータル平均入場者は332人であり、メディアテークの数値はその半分以下である。

メディアテークのギャラリーにおける数値的な分析をここで終え、次項ではメディアテーク内にある市民図書館の問題点を検証する。

4. 1. 4 市民図書館としての位置づけの曖昧さ

メディアテークの3、4階は市民図書館である。以前、仙台市内の西公園にあった「市

民図書館」を移設したことは、すでに触れた通りである。当初は仙台市青葉区の図書館である青葉区図書館として構想された。これは1997年12月の市議会（市民教育委員会）の議論でも明らかにされている。三浦良委員（自民）の、

「これは基本的には図書館行政の一環の青葉区の図書館だと、こういう位置づけ——この図書館の分についてはですよ——とさせていただいて間違いあるのか、ないのか、まず聞きたい*116」

と問うたのに対し、教育長は

「仮称せんだいメディアテークの中に設置を予定しております図書館につきましては、基本的には青葉区図書館ということで考えております*117」

と答えている。

しかし、最終的には市民図書館の名称のまま、メディアテークに入ることになる。そして、開館時には、

「中央図書館としての役割も果たし、計14台の図書検索端末が他の6つの市立図書館の貸し出し状況もオンラインでチェックする*118」

と、仙台市の中央図書館の役割を担っているようである。

ここで、仙台市における中央図書館とは何なのかを整理しておく。1988年に策定された仙台市図書館整備計画で、中央図書館、5区図書館*119、5分館、13分室を整備することが定められた*120。この計画に基づき、図書館が整備されていった。しかし、現在設置が終わっている図書館は、メディアテークにある市民図書館を含め、計7図書館と10分室である。当初整備計画に盛り込まれていた中央図書館については、整備がされなかった。その理由は、議会議事録を調べた限りでは明らかではない。

中央図書館が設置されなかったためか、メディアテークに入った図書館は、青葉区図書館ではなく市民図書館という名称とされ、「中央図書館」とみなされたようだが、その役割、機能などは明確にされないままである。

すでに述べたように、図書館運営については仙台市が直接行っている。財団の運営によるそれ以外のスペースとは、違った系列の運営である。この2つが融合して運営される必要性は、開館当初から指摘されている。

「『内部組織の融合は大きなテーマ。図書館とメディアテークの職員が、共同でプロジェクトを企画するなどして交流を図りたい』と佐藤室長*121 *122」

とあるのだが、4. 1. 2で調べたメディアテークの自主イベントでも、図書館と連携

したものにはなかった。メディアテーク内で、図書館を含めた一体運営はいまだ実現されていない課題である。

メディアテークの活動分析はここで終え、次節では仙台市が現在どのような文化芸術振興を行っているかを検証する。

4. 2 仙台市の文化芸術振興

4. 2. 1 「仙台方式」での「彫刻のあるまちづくり」

現在の仙台市における文化芸術振興をみていく上で、指摘しておかなければいけない過去の文化事業がある。それは「仙台市彫刻のあるまちづくり事業」である。この事業は1978年に市制施行88周年を記念して開始したもの。街の緑の空間に彫刻を配し、芸術性豊かで文化の薫るまちづくりを推進することを目的とし、12年計画で12彫刻作品を配置した。ここで事業は終了の予定であったが、1989年ふるさと創生事業に選定され^{*123}、さらに第2期として12年間12作品が設置された。

この事業では、「仙台市彫刻のあるまちづくり委員会」の審議報告に基づいて、まず設置する場所を選定する。次に設置する場所にふさわしい作風の彫刻家を選定する。選定された彫刻家は、現地を視察してから作品を構想し、制作案を作成。さらに模型による現地シミュレーションを実施し、作品を決定する。現地オーダーメイド方式とも言える方法は彫刻設置方法として多くの市町村の参考となり、「仙台方式」と呼ばれた^{*124}。

現在、パブリックアートが広まり、彫刻を街に置く自治体も少なくない。その先駆けともなり、24年間にわたり彫刻を設置してきた仙台市の事業は、評価されるべきである。文化芸術振興として重要な活動であった。

「仙台市彫刻のあるまちづくり事業」は2001年3月に最終作品を設置して終了している。折しも、同じ年の1月にメディアテークが開館している。次節では、現梅原市政における文化芸術振興について検証していく。

4. 2. 2 「仙台市都市ビジョン」から読む文化芸術振興

現在の仙台市での文化芸術振興をみるため、まず2007年1月に市によって策定された「創造と交流 仙台市都市ビジョン^{*125}」（以下「都市ビジョン」と略）における記述を調べる。2006年8月に有識者による「仙台都市ビジョン会議」を設置。この会議での議論をベースにして、市民の意見も取り入れ、2007年1月に発表したものがこの「都市ビジョン」である。この冒頭に、

「今後の仙台の都市づくりの基本的な方向性を示す”指針”として策定しました*126」

とあるように、”これからの仙台をどうしていくか”を示した仙台市の公式文書である。「都市ビジョン」ではまず『仙台市を取り巻く環境変化と都市づくりの課題』の検討と『仙台の強み・ポテンシャル』を整理した上で、『都市づくりの理念と方向性』を提示している。ここで4つの【基本方向性】を提示し、【基本方向性1】として【「創造」都市】を掲げている。この【「創造」都市】項目での「施策の方向性」のひとつとして「芸術・文化の創造性を生かした新しい都市の個性と活力の創出」が謳われ、文化芸術振興に関する施策を示している。

ここで具体的に示された施策（取り組み）は次の2項目*127。

(1) 世界に発信する都市文化の育成。都市の文化的魅力の向上

(2) 芸術や文化の創造性を活かした仙台独自の創造的産業の振興

前にも述べたように、仙台市は音楽の都「楽都」、演劇の都「劇都」をキャッチフレーズに、音楽（主にクラシック）と演劇の振興を行っている。(1)の「世界に発信する都市文化の育成。都市の文化的魅力の向上」では、この「楽都」、「劇都」への取り組みを核に、市民が文化・芸術に触れる機会を増やしていくことにより、都市の文化的魅力を向上させることを謳っている。

また、長期的視点に立った取り組みとして、パブリックアートの設置や、「街自体のミュージアム化を図る共同事業」の展開を示している。

また(2)の「芸術や文化の創造性を活かした仙台独自の創造的産業の振興」では、デジタルコンテンツ、映像、プロダクトデザインの創造的産業の育成、強化により、仙台独自の創造的産業の集積（クリエイティブクラスター）の形成を目指すとしている。

(1)の項目に、以下の通りのメディアテークに関する記述がある。

「創造的活動の拠点施設となっているせんだいメディアテークなどを拠点として、美術、映像分野と音楽・演劇・舞踏などの分野が融合する芸術・文化事業を総合的に展開していきます*128」

一般論として記述されており、具体的な内容が盛り込まれていない表現との印象を受ける。このメディアテークに関する記述は、実は後から加えられたものである。「市民ビジョン」は2006年8月から2007年1月までの作成過程において、2006年11月に「中間案」を市民に公開し*129、意見を募る「パブリックコメント」を実施した。この中間案には、上記のメディアテークに関する記述はなかった。公開後、ある市民から、

「創造の中には、美術系のアート（アー都）も含めるべきである。学術・音楽・芝居だけで学都*130とは呼べない。広瀬川などの自然美に似合う、人間の想像力もアートとしてまちのコンセプトに加えるべきと考える*131」（傍点筆者）

という意見が寄せられた。中間案ではメディアテークに関する記述はまったくなかったのだが、この意見に対応するためにこの一文を加えたようだ。

この経緯から、2つの事実が指摘できる。

ひとつは、仙台市における文化芸術振興の施策で、「音楽」「演劇」がまず優先され、「美術」はその次の位置（もしくはそれ以下）にあること。

そして、2つめとして、メディアテークが文化芸術の活動拠点として、最重要視はされていないことである。メディアテークウェブサイトの「理念・サービス」には「せんだいメディアテークは、美術や映像文化の活動拠点である」

と書かれているが、梅原市政ではこの認識が薄いことが感じられる。

終章

1. 「せんだいメディアテーク」は成功したと言えるのか

これまで4章にわたって、メディアテーク設立の経緯から現在の活動までを、いくつかの手法と視点から検証してきた。果たして「せんだいメディアテーク」は成功しているのか、否か。この章では、このことを考察していく。

序論でメディアテークが成功しているとするための3つの達成課題を提示した。ここでは、その課題を達成しているかをみる。

1. 1 ミュージアムとしてのメディアテーク

ひとつめの課題は、

①アート：ミュージアムとしての役割を果たしているか

である。

メディアテークのギャラリーがどのような経緯をもってつくられたかは、本論で検証した。また、市立美術館が現在のところ設立されていない事情についても触れた。

さて、メディアテークがミュージアムとしての役割を果たしていると言えるのか。結論から先に言ってしまう。メディアテークはミュージアムとしての十分な活動を行ってこなかった。

その理由として以下のことを指摘したい。この達成課題を提示した中で、ミュージアムの役割として、メディアテークでは「展示」と「教育普及」の2つを行うべきだと述べた。メディアテークでは、市民のためにミュージアムとして展示と教育普及の活動を十分に行っているかが重要である。

まず展示活動。ここでの展示とは、美術館で言う「企画展」のことと考える。市民がギャラリーを使つての芸術作品の発表も展示ではあるが、鑑賞者が限られた人であり、本論で言う展示ではない。

メディアテークでの企画展にあたるのは、「自主事業」である。4章で示したように、有料企画展の開催は多くない。2004、2005年は2企画、2006年は3企画である。平均入場者数も一日あたり162人と、これもすでに指摘したように仙台市民ギャラリーでの自主事業の半分以下である。

ギャラリー活動データからは、メディアテークではミュージアム、アートセンターとし

での運営ではなく、貸しギャラリーとしてしか運営されていないと判断せざるを得ない。メディアテークでのミュージアムとしての企画展は十分でないと考える。

また、教育普及活動はどうだろう。これも4章で指摘したようにメディアテークにおいて、ワークショップは主要なイベントとなっている。アート領域でのワークショップは開催されており、この点は評価できる。

ただ、教育普及はワークショップがすべてではない。講演会、セミナーの開催といった活動や、美術啓蒙活動の一環としてのアウトリーチ活動は、ほとんど行われていない。

これらの事実から、教育普及活動も十分とは言えない。

したがって、ミュージアムとしてのメディアテークはその目標を達成していない。

1. 2 メディアの棚としてのメディアテーク

2つめにあげた達成課題は、

②メディア：『メディアの棚』の機能を十分果たしているか

である。

この課題を検証する前提として、まずメディアの時代的な意味の変遷に触れておく。1980年代から1990年代にかけてはメディアという言葉が、とても強い力を持っていた。旧来の新聞、テレビ、雑誌などのマスメディアに対する新たなメディアとして登場した「ニューメディア」。

そしてニューメディアの後、1990年代に入り使われるようになった「マルチメディア」。これはコンピューター技術の発展に支えられた概念であったが*132、公共施設設立にも影響を与え、全国にマルチメディアの名称を冠した施設、設備がつけられた（例えばマルチメディアセンターはその典型的な例である）。

メディアの本来の意味は「媒体」であるが、その意味以上にメディアという言葉が魅力的な力を持っていた時代が1990年代であった。この時代に、メディアテークという施設が計画された。

しかし、マルチメディアが標榜された1990年代から、新たな時代の21世紀になり、メディアを取り巻く状況は大きく変わった。インターネット環境だけを見ても、ブロードバンドの爆発的な普及により、家庭内にあるパソコンで高速回線を使い、簡単にウェブサイトにはアクセスができるようになった。

個人がウェブサイトを持つことの一般化。そしてブログの誕生とその驚異的な普及。さらにSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サイト）の広がり。このインターネットをめ

ぐる環境の変化により、個人が容易に情報を発信できることになった。いいかえれば、誰でもメディアを持つことが可能になった。

個人がメディアを手軽に持てると、「メディアの棚」に納めておくべきメディアは何なのか。

さて、メディアテークのメディアの棚としての機能をみる。6 ページで引用した設計競技応募要綱に記載されたメディアテークの定義を再度提示する。

「メディアテークとは、感性のメディアとしてのアート、知性のメディアとしての図書や各種情報、そしてそれらが融合した新しいメディアとしての映像等を総合的に集積・蓄積するとともに、市民ひとりひとりが自ら創造し発信者となることを支援する、新しい時代の新しい都市機能空間をイメージするもの」

これが、メディアの棚としての機能を言い表してる。

今のメディアテークで棚に収められているメディア、すなわちメディアテークで提供されているメディアをあげる。市民図書館の図書、美術文化ライブラリーの美術関係図書、映像音響ライブラリーの CD・ビデオテープ・DVD、教材ライブラリーの地域映像である。

これらのメディアは、ばらばらに棚に置かれているだけである。体系的に提供されているわけではない。例えばデジタルアーカイブ化され、全体を検索し、閲覧できるシステムなどは整備されてはいない。

さらに言えば、メディアテークでは「メディアとは何か」が示されていない。何をもってメディアとし、それを納めにはどのような棚を整備するか、が明確ではない。ここがメディアテークという施設の問題点である。

2つめの目標も、達成していないと判断する。

1. 3 メディアテークとしての一体的な運営がされているか

3つめの達成課題は

③運営：施設としての一体的な運営がされているか

である。

この課題に対する現状についても、すでに述べた。メディアテークは図書館が仙台市の運営、それ以外の施設（カフェ、ショップを除く）が指定管理者制度による財団法人仙台市市民文化事業団による運営である。組織上は別々な運営となっている。

組織として別な運営であっても、実際は一体的に運営されていれば、評価されるべきである。実際はどうかのだろう。4. 1で調べた過去のイベントでも、ギャラリー、スタジ

オ、オープンスクエアで行われるイベントで、図書館と連携して行われた企画はなかった。残念ながらメディアテークでは、図書館を含み実質的にも一体的運営はされていないと判断せざるを得ない。

2. メディアテークをめぐる事象から学び取れること

本論の最後として、これまで本研究にてメディアテークについて検証してきたことから、何が学べるのかをまとめてみたい。

2. 1 公共施設を計画するとき、地方自治体はどう主体性を保つか

メディアテークを設立したのは、言うまでもなく地方自治体である仙台市である。研究を進めていく過程で、仙台市がどこまで主体性を保っていたか疑問を感じるがあった。

メディアテークの計画から完成、そして活動に至るまで、当然ながらいくつかの段階が踏まれた。それぞれの段階で仙台市から専門家への作業の委嘱、委託が行われている。例えば東北大学の菅野實らによる設計競技の応募要領の作成から、磯崎新を競技委員会の委員長とする設計競技の実施。施設建設を計画することは専門的な知識を必要とし、外部の専門家に作業を委託することは当然のことである。しかし、専門家まかせではなく、発注者（仙台市）の意志を反映させなければいけない。

また、施設の構想を練り上げていく段階で市民の団体からの様々な要望が寄せられる。宮城県芸術協会のギャラリー仕様への要望が、その典型的な例である。市民の意見、要望を取り入れることは重要なことであり、かつ必要なことでもある。ただ、市民団体らとの懇談に臨む前提として、仙台市にメディアテークをこのようにしたいという確固たる考えがあったのだろうか。少なくとも宮城県芸術協会とのやりとりからは、仙台市側に強い意志があったとは感じられない。

地方自治体が施設をつくっていく過程での、主体性を保っていくことの難しさ。そして、地方自治体が主体性をもつため、組織としての対応の仕組みをつくる必要があると考える。

2. 2 テクノロジーの進歩にどのように対応するか

前節でメディアをめぐる環境が、近年著しく変化したことに触れた。メディアテークの計画から建築の設計、建設の実施そして開館するまでの期間には、メディアをめぐる技術は著しく進歩した。インターネット環境の進化を始め、映像機器などの製品サイクルも日々短くなっている。施設に設置された機器、設備が開館当時は最新のものであっても、年

月が経てば「陳腐化」する。これは、当然起こりうることである。

また設備面だけではなく、施設の構想そのものに関わることも想定される。例えば、これも前節で触れたマルチメディアの名称を冠した施設は、マルチメディアそのものが新しくない概念になっており、これが施設のあり方に影響を与えることもありうる。

最先端の設備機器を整備した公共施設が、テクノロジーの変化にともない陳腐化することに対し、どう対応していくか。これは、解決しなければならない難しい課題である。

2. 3 施設に対する行政評価の必要性

序論において達成課題を設定する際にも述べたが、仙台市においては、現在施設に対するなんらかの評価作業はこれまで行われてこなかった。外部評価であれ、自己評価であれ、メディアテークへの評価が行われていたなら、施設として成功しているか否かの判断する基準となったはずである。

少なくとも大規模な予算を使ってつくられた公共施設に対しては、行政による評価がされる必要があると考える。

以上3点を、メディアテークをめぐる事象から学べることとして本論を終えたい。

おわりに せんだいメディアテーク、そして仙台の明日に向けて

いったい誰が責任者なのか。メディアテークという施設をつくり上げていく経緯を調べ、検証していく過程で、しばしばこの疑問が心をよぎった。「メディアテーク」というコンセプトが掲げられ、従来にない芸術・文化の拠点ともなるべき複合施設を設立する中で、誰が責任を負ってこの業務を遂行したのかが、わからないのである。

例えば3. 5. 2で指摘したプロジェクトチームの曖昧な位置づけ。このチームの役割は何なのか。メディアテークの館長をつとめた奥山恵美子*133はこう書いている。

「(桂英史氏、小野田泰明氏らをメンバーとして)メディアテークの運営や事業を考えるプロジェクトチームが立ち上げられた。ちなみに、このプロジェクトチームには事務局(仙台市の建設担当事務局・具体的には生涯学習課)も参加したが、市が設置した外部委員会ではなく、関係者のボランティアな活動として運営されていた。市としては、公式には、すでに事業構想等は整っているという考えであった*134」

ボランティアとは、どんな意味なのか。プロジェクトチームはボランティア、つまり無償で、この仕事をしたということであろうか。メディアテークの運営、事業をつくり上げていく仕事を委任するなら、きちんと報酬を支払うべきではなかったのか。また、プロジェクトチームのメンバーも、もし無償であるならば、その発言などに責任は問われず、ある意味「好き勝手なこと」を言うだけの可能性も否定できない。プロジェクトチームの運営について、市は責任を回避したとしか思えない。

仙台市は、メディアテークをどのような施設にしたいかについて真剣に考え、検討したのか。担当の生涯学習課も、市長の藤井黎も、市民の立場に立って取り組んだのか。

また市民もメディアテークはどんな施設になるのか、という疑問を提示したのだろうか。仙台市と市民、双方にメディアテークをよりよい施設にしようとする努力が少し足りなかったのでは、と思う。

しかし、メディアテークも改善していこうとしている。本年(2008年)2月から3月にかけてメディアテーク内のフロアの改装を行う予定だ。主な改装内容は、現在7階にある映像音響ライブラリーなどを2階に移設する。これにより、3、4階の市民図書館と併せ、2階から4階に辞書、図書や雑誌、CD・DVD資料、情報検索用端末、バリアフリー情報などの情報サービス機能が集まる。また、現在2階にある施設利用等受付を7階に移設する。このことにより、ギャラリー、スタジオシアターを中心とする芸術文化施設機能

が5階以上に集まる。

このフロア改装は利用者の立場にたった改善であり、メディアテークをよりよく使ってもらうための努力として評価したい。これを機に、運営面でもメディアテークとして一体化を図り、市民にとって魅力的なイベントをより多く開催することを期待したい。

メディアテークの設計者・伊東豊雄は序論で紹介した「アンダーコンストラクション*135」の中でこう記している。

だがメディアテークは数年以上にもわたって既に「使用」されているのである。オープンという瞬間はこの建築が生き続ける永い歴史の通過点に過ぎない。それはつくり続けなくてはならないし、変わり続けなくてはならない。せんだいメディアテークは永久に<アンダーコンストラクション>でなくてはならないのだ。

せんだいメディアテークが変わり、成功といえる評価を得る日を楽しみにして、本研究を終えることとしたい。

注

- *1 URL <http://www.smt.city.sendai.jp/>
- *2 せんだいメディアテーク・プロジェクトチーム編（著） NTT 出版 2005 年
- *3 <http://archive-www.smt.city.sendai.jp/publication/>
- *4 伊藤豊雄略歴：1965 年 東京大学工学部建築学科卒業・1966～69 年菊竹清訓建築設計事務所勤務・1971 年 株式会社アーバンロボット(URBOT) 設立・1979 年 事務所名を伊東豊雄建築設計事務所に改称／『建築:非線型の出来事 smt からユーロへ』（伊東豊雄建築設計事務所編著 彰国社 より引用）
- *5 『せんだいメディアテーク コンセプトブック』2001 年版、2003 年版にも同じ文章が掲載されている。
- *6 『（仮称）せんだいメディアテーク設計競技記録』仙台市 1995 年 によれば「河北美術展」を指す
- *7 1995 年 3 月 仙台市発行
- *8 p.123 に収録。
- *9 当時は仙台市側には「せんだいメディアテーク」という名称はまだなく「新市民ギャラリー建設事業」とされていた。
- *10 小野田による表現。
- *11 以上の内容は、『（仮称）せんだいメディアテーク設計競技記録』仙台市 1995 年 p.123 に収録。
- *12 小野田によれば、「6つの計画課題」とされている。
- *13 例えば琵琶湖博物館、沖縄県立美術館・博物館では「活動方針」が公開されている。
- *14 岡部あおみ・神野善治・杉浦幸子・新見隆（著）2002 年 武蔵野美術大学
- *15 『ミューゼオロジー入門』に収録されてる「ミューゼオロジーとは何か？」（新見隆）には、「つまりアートとミュージアムは表裏一体なのだ」とある。
- *16 『（仮称）せんだいメディアテーク設計競技記録』 p.160
- *17 ビブリオテーク=bibliothèque 仏語
- *18 『せんだいメディアテーク コンセプトブック』せんだいメディアテーク・プロジェクトチーム編（著） NTT 出版 2005 年 p.30
- *19 『せんだいメディアテーク コンセプトブック』せんだいメディアテーク・プロジ

ェクトチーム編（著） NTT 出版 2005 年 p.180

*20 メディアテーク ウェブサイト内「総合施設案内」

*21 公開空地についてはメディアテークウェブサイト内「メディアテークひと言メモ」に以下の説明がされている。『公開空地とは、建物が建築許可を受ける際に、許可条件として敷地内に一定の広さで設置を求められた公園のような空間のことです。ふつうは屋外に造られるのですが、メディアテークは開館時間の長さ、1階空間の街路性の高さと同辺への文化的な波及効果、また定禅寺通と一体化できる大型開口扉の設置などにより、屋内を含めた区画が公開空地と指定されています』

*22 2007 年 12 月 1 日推計人口・仙台市公式ウェブサイト掲載データより引用。

*23 ここでは東北地方を青森県、岩手県、秋田県、山形県、福島県、宮城県の 6 県とする。

*24 朝日新聞社 2007 年

*25 『2007 民力』 朝日新聞社 2007 年 p.75

*26 「民力総合指数」は「基本指数」「産業活動指数」「消費指数」「文化指数」「クラス指数」に分類された計 30 指標により算出されている。算出指標については『2007 民力』p.75 に記載。

*27 県庁所在の市と、それに準ずる人口を持つ市とした。

*28 合併特例債などの財政面での優遇措置を主な原因とした 1999 年 4 月頃から 2006 年 4 月頃にかけて起こった合併ブーム。

*29 さいたま市、新潟市、静岡市、浜松市、堺市。

*30 【財団法人仙台文化文化事業団】などの 3 項目がある。

*31 仙台市の外郭財団。p.32 に詳述。

*32 2008 年 1 月 1 日現在推定人口 938,695 人。（千葉市公式ウェブサイトによる）

*33 仙台市公式ウェブサイト内の「文化事業」にある「関連施設」から転記した。

*34 仙台市民文化事業団のウェブサイトでの記述による。

*35 仙台市民文化事業団のウェブサイトでの記述による。

*36 URL <http://www.smt.city.sendai.jp/smt/about/step/>

*37 石井亨経歴は『河北新報』1993 年 6 月 29 日記事より引用

*38 仙台市公式ウェブサイト内「仙台市の歩み」

-
- *39 ここでは、バブル景気は1986年12月から1991年2月までとする説にしたがう。
- *40 仙台市公式ウェブサイト内「仙台市の歩み」より。
- *41 金丸信元自民党副総裁の巨額脱税事件の押収資料から、ゼネコン各社から中央政界や地方政界に多額の賄賂が送られている実態が判明する。東京地検特捜部により1993年から1994年にかけて、建設相、宮城県知事、茨城県知事、仙台市長が逮捕される事態に発展した。
- *42 藤井黎経歴は『河北新報』2005年10月12日記事より。
- *43 梅原克彦経歴は『河北新報』2006年1月3日記事より。
- *44 『河北新報』2007年9月5日
- *45 メディアテークウェブサイト内「開館までの歩み」
- *46 JR仙台駅より徒歩7.8分の距離にある。
- *47 ギャラリーの運営は財団法人仙台市民ギャラリー。
- *48 展示スペースは3室合計で459.5㎡。
- *49 『仙台市議会議事録』（以下『議事録』と略）1990年6月15日 平成2年第2回定例会
- *50 宮城県公式ウェブサイト内「芸術文化団体」記載情報より。
- *51 展示室は245㎡と249㎡の2室。
- *52 宮城県美術館と芸術協会をめぐる経緯は、宮城県美術館の学芸員の方に聞き取り調査をさせていただいた。
- *53 『仙台市民ギャラリーの歩み』（財）仙台市民ギャラリー 2000年 p.10「仙台市民ギャラリー回顧」 成瀬忠行（著）
- *54 せんだいメディアテーク発行 2002年
- *55 『せんだいメディアテーク建設事業の歩み』 p.7
- *56 『議事録』 1991年12月5日 決算等審査特別委員会
- *57 『議事録』 1990年3月9日 平成2年第1回定例会
- *58 この時期、市民ギャラリーを含む施設を池田議員がこう称していたようである。議事録では本質問以外に仙台芸術センターが使われている記録はない。
- *59 『議事録』 1990年3月8日 平成2年第1回定例会
- *60 『議事録』 1991年2月21日 平成3年第1回定例会

-
- *61 『議事録』 1991年9月12日 平成3年第3回定例会
- *62 『議事録』 1992年2月27日 平成4年第1回定例会
- *63 現仙台文学館の場所・台原森林公園に隣接した緑豊かな場所にある。
- *64 『議事録』 1992年9月10日 平成4年第3回定例会
- *65 『議事録』 1992年12月1日 平成4年第4回定例会
- *66 メディアテークウェブサイト「開館の歩み」に「1992年1月 定禅寺通交通局跡地に新市民ギャラリーを建設する方針が決定」と記載。
- *67 宮城正俊（みやぎまさとし）略歴：1971年より宮城県美術文芸講座講師、1975年より（財）仙台市民ギャラリー理事長・宮城県教育文化功労者、仙台市政功労者、地域文化功労文部大臣表彰（『東北やきもの紀行』 宮城正俊（著） 1999年 無明舎出版 奥付より引用）
- *68 委員会メンバーは以下の通り（『河北新報』 1992年6月11日）。
- 委員長：宮城正俊・副委員長：成瀬忠行（県芸術協会理事長） 委員：岡征夫（仙台市議）、小野昌和（河北新報社学芸部長）、菅野實（東北大工学部助教授）、庄子晃子（東北大講師）、高倉健（陶芸家）、加藤義雄（仙台市市民局長）東海林恒英（仙台市教育長）、浜田直嗣（仙台市博物館副館長）
- *69 『せんだいメディアテーク建設事業の歩み』仙台市 2002年 p.7
- *70 『議事録』 1996年10月3日 決算等特別新議員会
- *71 『議事録』 2003年3月10日 予算等審査特別委員会
- *72 『せんだいメディアテーク建設事業の歩み』仙台市 2002年 p.9
- *73 『せんだいメディアテーク建築事業の歩み』仙台市 2002年 p.10
- *74 『議事録』 1994年9月19日 市民教育委員会
- *75 『議事録』 同上
- *76 『議事録』 同上
- *77 仙台市により制定されたメディアテーク運営の条例（メディアテークウェブサイト「開館までの歩み」による）
- *78 仙台国際センターにて公開された。
- *79 市役所にて公開された。
- *80 「インタビュー」は応募要綱での表現。審査員と優秀作を作成した設計者との面談。

-
- *81 伊東は(株)伊東豊雄建築設計事務所として応募、古谷誠章は個人で応募。
- *82 『(仮称) せんだいメディアテーク設計競技記録』 仙台市 1995年 p.20「表彰式でのスピーチより」磯崎新
- *83 これまでの経緯から仙台市のことを指すと判断される。
- *84 メディアテークウェブサイト内「プロジェクト検討委員会報告」
- *85 『河北新報』 1995年8月29日
- *86 同上
- *87 メディアテークウェブサイト内「開館までの歩み」
- *88 メディアテークウェブサイト内「(仮称) せんだいメディアテークプロジェクト検討委員会 報告書」
- *89 同上
- *90 同上
- *91 同上
- *92 この「希求」について明確な資料はないが、事業者(市)、市民団体(主に芸術協会)からの諸々の要望だと推測される。
- *93 メディアテークウェブサイト内「(仮称) せんだいメディアテークプロジェクト検討委員会 報告書」
- *94 研究開発活動とはメディアテークウェブサイト内の「せんだいメディアテークプロジェクト検討委員会」にある【メディア・コミュニケーションの方法論的研究】を指すものと考えられる。
- *95 メディアテークウェブサイト内「プロジェクトチーム ’96」
- *96 カッコ内項目はウェブサイト内記載議事録より引用。
- *97 メディアテークウェブサイト「プロジェクトチーム ’97 議事録」
- *98 伊東豊雄建築設計事務所から参加しているメンバー。伊東ほか3、4人の所員が参加している。
- *99 『せんだいメディアテーク建築事業の歩み』仙台市 2002年 p.15
- *100 『河北新報』 1995年10月31日
- *101 『河北新報』 2000年8月19日
- *102 『河北新報』 2001年1月20日

-
- *103 『河北新報』 2005年1月25日「メディアテーク 私の期待」
 - *104 仙台空襲と復興事業の記録を保存している施設。1981年開館。
 - *105 メディアテークで開催したものを、ウェブサイトで「イベント」という言葉で表現しているため、この論文でもこの言葉を使用する
 - *106 ここでの年度は4月から翌年3月までの期間を指している。
 - *107 財団法人仙台市民ギャラリーは2000年10月30日に解散している（『仙台市民ギャラリーの歩み』による）
 - *108 『仙台市民ギャラリーの歩み』（財）仙台市民ギャラリー 2000年
 - *109 入館者との表現は『仙台市民ギャラリーの歩み』（同上）による。
 - *110 財団法人仙台市民ギャラリーは2000年10月30日に解散している（『仙台市民ギャラリーの歩み』による）
 - *111 『せんだいメディアテーク 年報 2004』せんだいメディアテーク 2005年 及び『せんだいメディアテーク 年報 2005』せんだいメディアテーク 2005年
 - *112 メディアテークのギャラリーはメディアテークウェブサイトより、市民ギャラリーは『仙台市民ギャラリーの歩み』（財）仙台市民ギャラリー 2000年により確認。
 - *113 「企画事業」は有料である（『仙台市民ギャラリーの歩み』による）
 - *114 『せんだいメディアテーク 年報』に記載された表現。
 - *115 （財）仙台ひと・まち交流財団ウェブサイトに掲載。
 - *116 『議会議事録』 1997年12月12日 市民教育委員会
 - *117 『議会議事録』 1997年12月12日 市民教育委員会
 - *118 『河北新報』 2001年1月25日 「100万市民に情報発信」
 - *119 青葉、泉、宮城野、若林、太白の各区。
 - *120 『議事録』 1997年12月9日 平成9年第4回定例会
 - *121 メディアテーク企画・活動支援室 佐藤泰（当時）
 - *122 『河北新報』 2001年10月26日 「どう生かす せんだいメディアテーク」
 - *123 竹下登内閣が行った政策のひとつで、1988年から1989年にかけて、全国の市区町村に対し1億円を交付した。地方交付税の形で支給された。
 - *124 仙台市ウェブサイト内「彫刻のあるまちづくり」
 - *125 仙台市ウェブサイトにて公開し、冊子も作成した。

-
- *126 「創造と交流 仙台市都市ビジョン」はじめに 仙台市長 梅原克彦
- *127 「創造と交流 仙台市都市ビジョン」 p.23
- *128 「創造と交流 仙台市都市ビジョン」 p.23
- *129 市のウェブサイトで公開し、市役所などでも配布。
- *130 仙台は「学都仙台」と呼ばれる歴史を持つ。ウェブサイト「学都仙台コンソーシアム」(URL:<http://www.gakuto-sendai.jp/index.html>)に以下の記述がある。
「いつ頃から「学都」と呼ばれるようになったのか、定説はありませんが、既に明治 40 年(1907 年) 12 月の地元紙に「学都と学界」という標題の記事が見られ、大正年間にも「学都」の呼称が印刷物に見られるなど、100 年以上の歴史を有しています」
- *131 仙台市公式ウェブサイト掲載「都市ビジョン中間案に対する意見とそれに対する対応(案)について」2006 年 11 月掲載。
- *132 広辞苑(第 5 版)によれば「情報を伝達するメディアが多様になる状態。また、コンピューターで映像・音声・文字などの情報を複合し、一元的に扱うこと」と定義されている。
- *133 現仙台市副市長
- *134 「複合施設が拓く図書館の未来 せんだいメディアテークの実践」『都市問題』2005 年 9 月号
- *135 『せんだいメディアテーク コンセプトブック』 p.38 収録

【図表1】東北主要都市 民力

市	県	人口	市の民力総合指数
仙台	宮城	1,029,042	704.2
青森	青森	313,733	212.3
弘前	青森	189,204	132.2
八戸	青森	248,776	177.3
盛岡	岩手	294,158	214.4
秋田	秋田	330,593	234.4
山形	山形	251,022	186.7
福島	福島	288,652	200.5
郡山	福島	334,756	307
いわき	福島	358,847	255

※人口データは『07 民力』より

【図表2】政令指定都市 美術館設置状況

市	市立美術館	政令指定都市指定日
札幌市	芸術の森美術館・本郷新記念札幌彫刻美術館	1972年4月1日
仙台市	なし	1989年4月1日
千葉市	千葉市美術館	1992年4月1日
横浜市	横浜美術館	1956年9月1日
川崎市	川崎市民ミュージアム	1972年4月1日
名古屋市	名古屋市美術館	1956年9月1日
京都市	京都市美術館	1956年9月1日
大阪市	大阪市立美術館・大阪市立東洋陶磁器美術館	1956年9月1日
神戸市	神戸市立小磯記念美術館・神戸ファッション美術館	1956年9月1日
広島市	広島市現代美術館	1980年4月1日
北九州市	北九州市立美術館	1963年4月1日
福岡市	福岡市美術館・福岡アジア美術館	1972年4月1日

【図表3】政令指定都市 ギャラリー設置状況

市	市民ギャラリー
札幌市	市民ギャラリー・写真ライブラリー
仙台市	せんだいメディアテーク
千葉市	千葉市民ギャラリー・いなげ
横浜市	横浜市民ギャラリー
川崎市	川崎市民ギャラリー(6箇所)
名古屋市	名古屋市民ギャラリー栄・名古屋市民ギャラリー矢田
京都市	京都芸術センター
大阪市	市立枚方市民ギャラリー
神戸市	王子市民ギャラリー
広島市	市民ギャラリー(文化創造センター内)
北九州市	市民ギャラリー(北九州芸術劇場内)・市民ギャラリー(門司麦酒煉瓦館内)
福岡市	市民ギャラリー(福岡市美術館内)

【図表4】仙台市 展示・文化施設

施設名	備考
ギャラリーホール	市役所1階の小スペース
八木山動物公園	
仙台文学館	(財)仙台市民文化事業団を指定管理者とする運営
博物館	
科学館	
せんだいメディアテーク	(財)仙台市民文化事業団を指定管理者とする運営
こども宇宙館	2007年12月閉館
天文台	2007年12月旧天文台閉館。2008年7月移転新築オープン。
地底の森ミュージアム	(財)仙台市民文化事業団の管理
縄文の森広場	(財)仙台市民文化事業団を指定管理者とする運営
歴史民俗資料館	(財)仙台市民文化事業団を指定管理者とする運営
戦災復興記念館「資料展示室」	(財)仙台ひと・まち交流財団と1法人を指定管理者とする運営
旧伊達邸「しょう景閣」	
秋保・里センター	
秋保工芸の里	
晩翠草堂	
仙台城見聞館	
大倉ふるさとセンター	
水道記念館	
市電保存館	
イズミティ21(仙台市泉文化創造センター)	(財)仙台市民文化事業団と2法人を指定管理者とする運営
青年文化センター	(財)仙台市民文化事業団を指定管理者とする運営
せんだい演劇工房10-BOX	(財)仙台市民文化事業団の管理

【図表5】宮城県芸術協会説明会・打ち合わせ等

1995年6月2日	メディアテークわいわいトーク(市民懇談会)
1995年10月26日	せんだいメディアテークメディアテーク利用者ヒアリング
1995年11月10日	芸協と懇談会
1995年11月21日	メディアテークわいわいトーク(市民懇談会)
1996年1月10日	芸協ヒアリング
1996年2月7日	芸協役員市長訪問(ギャラリー階問題について合意)
1996年9月10日	宮城県芸術協会(実施設計及び事業について)
1997年12月11日	宮城県芸術協会(工事着工前)
1999年12月3日	宮城県芸術協会(三役政策会議後)
2000年4月19日	宮城県芸術協会(ギャラリー利用について)
2000年11月24日・27日	宮城県芸術協会(現場視察)

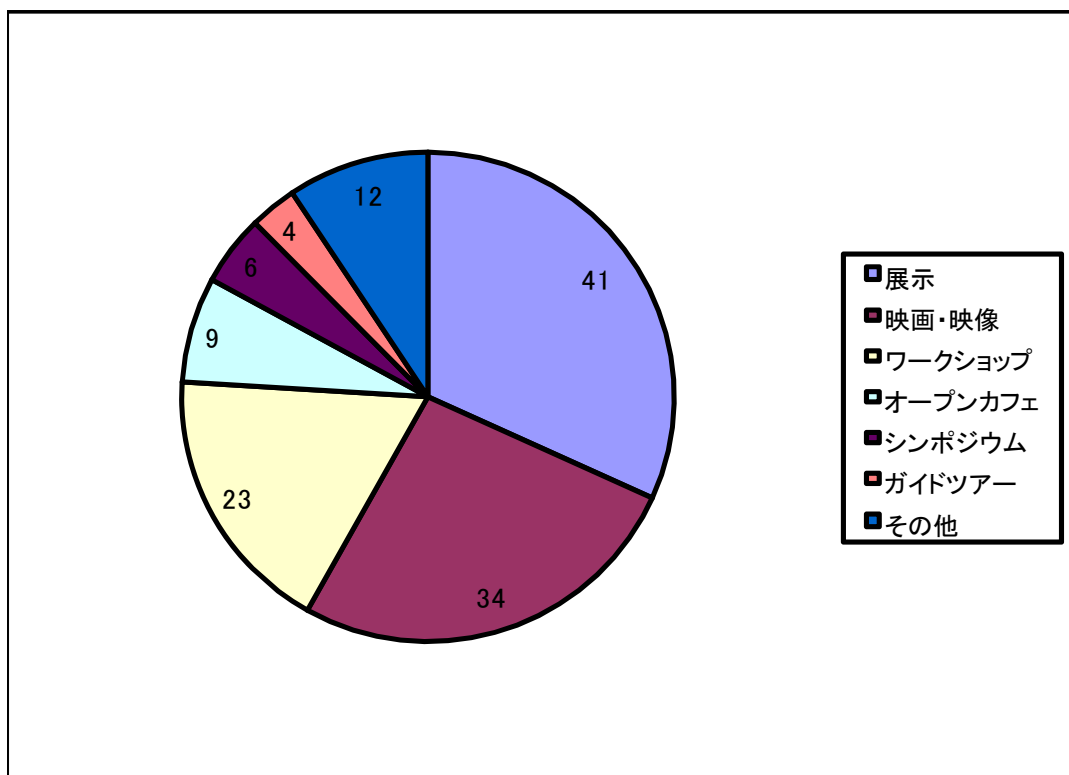
※芸協＝宮城県芸術協会

【図表6】メディアテーク 自主イベント 一部データ

	カテゴリー	内容詳細	開催場所	有料
せんだいメディアテーク2001年度自主イベントの記録				
1	展示	ことば	G4200/G3300	○
2	展示	写真	G4200	○
3	展示	ゲーム	G4200	○
4	展示	美術	G3300	○
5	展示	WS型展示		
6	展示		G4200/G3300	
7	WS	smt	STUDIO	
8	映画		シアター	○
9	展示 WS	映像	OS/G3300/シアター	
10	WS	映像	OS	
11	シンポジウム	smt	OS	
12	展示	smt	G4200	
せんだいメディアテーク2002年度自主イベントの記録				
1	展示 WS	美術	OS/シアター/G4200	○
2	WS	討論	7F	○
3	展示	写真	G4200	○
4	WS	造形	STUDIO	
5	展示	美術	G3300	
6	展示	科学	G4200	○
7	映画		シアター	○
8	展示		G4200/G3300	
9	展示	文字		
10	展示	smt	G4200	
11	展示	美術	OS	
せんだいメディアテーク2003年度自主イベントの記録				
1	展示	現代アート	G4200	○
2	映画	映画	シアター	○
3	展示	写真	G4200	○

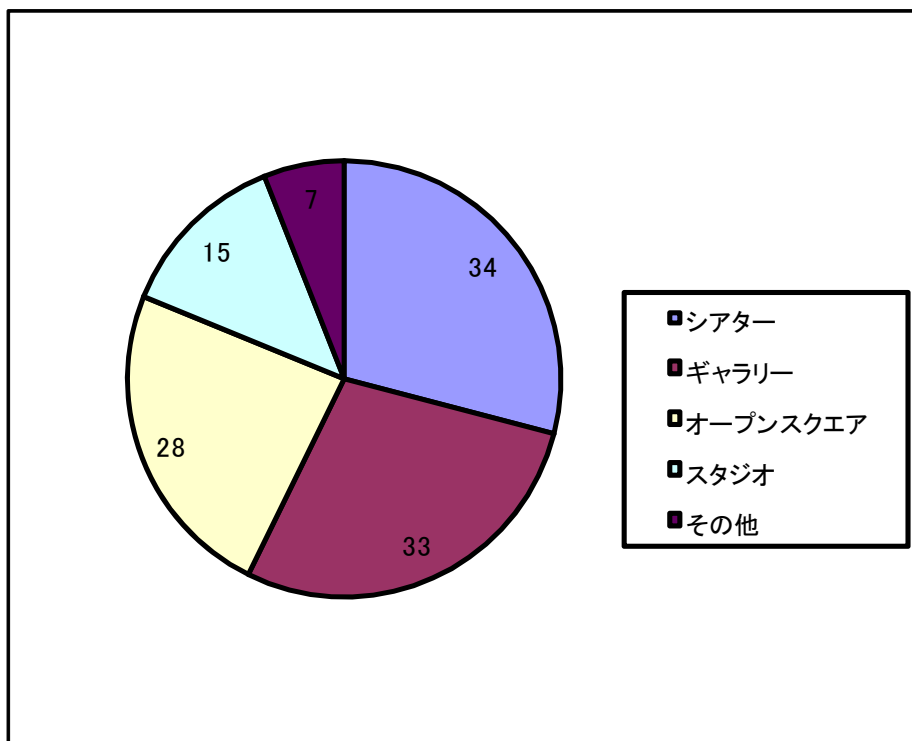
【図表7】メディアテーク 自主イベント 内容別分析

カテゴリー	開催数	比率
展示	41	31.8%
映画・映像	34	26.4%
ワークショップ	23	17.8%
オープンカフェ	9	7.0%
シンポジウム	6	4.7%
ガイドツアー	4	3.1%
その他	12	9.3%
計	129	100.0%



【図表8】メディアテーク 自主イベント 場所別分析

場所	開催回数	比率
シアター	34	29.1%
ギャラリー	33	28.2%
オープンスクエア	28	23.9%
スタジオ	15	12.8%
その他	7	6.0%
計	117	100.0%



【図表9】仙台市民ギャラリー 入館者データ(1986～1999)

年	一般会場利用者		自主企画					
			I 自主事業		II 公募展		III 共催事業	
	件数	入館者	件数	入館者	件数	入館者	件数	入館者
1986	63	77,504	2	4,492	1	2,399		
1987	60	79,048	1	4,805	1	3,007	1	1,231
1988	64	100,484	1	4,791	1	3,605	1	1,377
1989	68	106,064	1	10,172	1	5,133	1	1,035
1990	66	117,499	1	4,085	1	4,047	1	1,676
1991	69	119,183	1	4,484	1	3,789	1	1,548
1992	71	127,733	1	3,051	1	3,146	1	1,310
1993	77	130,372	1	6,650	1	3,015		
1994	73	127,800	1	4,079	1	4,571	1	911
1995	77	129,164	1	3,088	1	5,388		
1996	76	120,012	1	3,218	1	5,375		
1997	73	116,843	1	1,244	1	4,840		
1998	71	115,357	1	3,108	1	5,009		
1999	72	108,871	1	3,438	1	5,298	1	1,137
計	980	1,575,934	15	60,705	14	58,622	8	10,225
平均	70	112,567						

一般会場利用者 1件あたり平均入館者:1,608人(112,567÷70)

【図表10】メディアテーク ギャラリー 利用者データ

	ギャラリー		
	利用件数	利用率(%)	利用者数(人)
2004	151	93.9	250,727
2005	174	95.9	233,036
	325		483,763
平均	162.5		241,882

ギャラリー利用者 1件あたり平均入館者:1,489人(483,763÷325)

【図表11】仙台市民ギャラリー 自主事業 入場者分析

開催年	展覧会数	入場者	開催期間 (日数)	一日あたり 入場者
1975	2	15,012	32	469.1
1976	2	16,874	45	375.0
1977	2	22,969	33	696.0
1978	1	16,912	17	994.8
1979	1	16,991	33	514.9
1980	2	5,839	30	194.6
1981	3	7,865	46	171.0
1982	2	5,554	29	191.5
1983	2	10,203	33	309.2
1984	2	4,934	28	176.2
1985	2	3,530	27	130.7
小計	21	126,683	353	358.9
1986	2	4,492	26	172.8
1987	1	4,805	15	320.3
1988	1	4,791	15	319.4
1989	1	10,172	15	678.1
1990	1	4,085	15	272.3
1991	1	4,484	15	298.9
1992	1	3,051	15	203.4
1993	1	6,650	15	443.3
1994	1	4,079	15	271.9
1995	1	3,088	10	308.8
1996	1	3,218	15	214.5
1997	1	1,244	10	124.4
1998	1	3,108	15	207.2
1999	1	3,438	15	229.2
小計	15	60,705	211	287.7
合計		187,388	564	332.2

【図表12】メディアテーク 有料企画展 入場者集計

開催年	展示企画名	入場者数	開催期間	一日あたり入場者
2004	フィンランドの美術-神話が息づく自然の国	7,184	29	247.7
	景観 もとの島	1,157	28	41.3
2005	85/05-幻のつくば写真美術館からの20年	2,557	29	88.2
	20世紀デザインの異才 ジャン・ブルーヴェ	2,129	19	112.1
2006	GUNDAM 来たるべき未来のために	12,388	33	375.4
	青葉縁日	4,478	30	149.3
	Re:search オーストラリアと日本のアート・コラボレーション	2,150	30	71.7
	計	32,043	198	161.8

せんだいメディアテーク関連年表

年	月	事柄	出典
1975	昭和50年	7 仙台市民ギャラリー開設	1
1981	昭和56年	11 宮城県美術館開館	2
1989	平成元年	8 宮城県芸術協会から(仙台市に対して)、大型ギャラリーを中心とした美術館建設の陳情が提出される	3
1992	平成4年	1 新市民ギャラリーを文学館と併設で、定禅寺交通局跡地に建設する方針が決定	3
		9 文学館については市内他所に単独で建設することとし、新市民ギャラリーは現市民図書館を移転した青葉区図書館との併設にする方針を決定	3
1993	平成5年	2 用地取得開始(1994年度完了)	3
		3 「新市民ギャラリー検討委員会」が基本構想の提言を市長へ提出	3
		6 石井亨仙台市長 ゼネコン汚職にて逮捕(同年7月辞職)	
		8 藤井黎、仙台市長に就任	
1994	平成6年	2 設計競技にあたっては公開設計競技(コンペ)方式によることを決定	3
		2 市民ギャラリー計画につき各市民層からの意見を聞く	3
		5 定禅寺街づくり協議会から新市民ギャラリー等建設について陳情書が提出され	3
		6 新市民ギャラリー、青葉区図書館、映像メディアセンター、視覚障害者のための情報提供施設の機能を融合し、建設地である定禅寺通にふさわしい新しい芸術文化の拠点施設として公開設計競技を実施すると憂いことで、事務局において応募要領案の検討を開始	3
		7 設計競技審査員への就任依頼	3
		8 設計競技における施設名称を(仮称)せんだいメディアテークとし、従来にない公開性の高い方式を採用する方針を決定。	3
		「市民わいわいトーク ～新市民ギャラリー等建設についての市民懇話会～」を開催	3
		8～10 市民からのアイデア募集「21世紀の定禅寺通り・私達の夢 ～市民アイデア大募集～」実施	3
		9 「(仮称)せんだいメディアテーク設計競技」開始	4
1995	平成7年	3 設計競技において伊東豊雄建築設計事務所が最優秀者に決定	4
		6 メディアテーク市民懇話会「わいわいトーク」の実施	5
		8 メディアテーク・プロジェクト検討委員会第1回	4
		10 メディアテーク利用団体などヒアリングの実施	4
		11 メディアテーク市民懇話会「わいわいトークII」の実施	4
1996	平成8年	1 県芸術協会役員 仙台市長訪問(ギャラリー階問題について合意)	5
		5 プロジェクト検討委員会報告書提出	4
1997	平成9年	10 建設工事施工業者決定	4
		12 宮城県芸術協会説明会(工事着工前)	5
		建設工事着工	4
1999	平成11年	3 仙台文学館開館	6
		4 仙台ひと・まち交流財団にメディアテーク準備室設置	4
2000	平成12年	3 せんだいメディアテーク条例制定	4
		4 宮城県芸術協会説明会(ギャラリー利用について)	5
		8 建築竣工・施設引き渡し	4
		9 仙台市民ギャラリー・仙台市視聴覚教材センター・仙台市民図書館閉館	4
		12 仙台市民図書館移転	4
2001	平成13年	1 せんだいメディアテーク・仙台市民図書館開館	4
2005	平成17年	4 財団法人仙台ひと・まち交流財団による指定管理者制度での運用に移行(仙台市図書館の運営を除く)	7
2005		8 梅原克彦、仙台市長に就任	
2007	平成19年	4 指定管理者が財団法人仙台市市民文化事業団に変更	4

出典:1:『仙台市民ギャラリー10年のあゆみ』 2:宮城県美術館公式ウェブサイト
 3:『(仮称)せんだいメディアテーク設計競技記録』 4:せんだいメディアテーク公式ウェブサイト
 5:『せんだいメディアテーク建設事業のあゆみ』 6:ウェブサイト記載資料による 7:仙台市公式ウェブサイト

参考資料一覧

①文献資料

資料名	著者	出版社／発行元	出版年
1 仙台市民ギャラリー10年のあゆみ	(財)仙台市民ギャラリー	(財)仙台市民ギャラリー	1986
2 (仮称)せんだいメディアテーク 設計競技記録	(仮称)せんだいメディアテーク設計 競技事務局／編集	仙台市	1995
3 仙台市民ギャラリーのあゆみ	(財)仙台市民ギャラリー	(財)仙台市民ギャラリー	2000
4 仙台市彫刻のあるまちづくり	仙台市建設局百年の杜推進部緑化推 進課／編	仙台市建設局百年の杜推進部緑化 推進課	2001
5 人間交際術	桂英史	平凡社	2001
6 せんだいメディアテーク年報2001		せんだいメディアテーク	2002
7 入門 ミュージアムの評価と改善	村井良子他	アム・プロモーション	2002
8 行政評価の世界標準モデル	米国強制学会・行政経営センター	東京法令出版	2002
9 せんだいメディアテーク建設事業のあゆみ	せんだいメディアテーク	せんだいメディアテーク	2002
10 せんだいメディアテーク年報2002		せんだいメディアテーク	2003
11 未来をつくる図書館	菅谷明子	岩波書店	2003
12 建築:非線型の出来事 smtからユーロへ	伊東豊雄建築設計事務所編著	彰国社	2003
13 せんだいメディアテーク年報2003		せんだいメディアテーク	2004
14 神奈川県立近代美術館年報2004		神奈川県立近代美術館	2005
15 せんだいメディアテークコンセプトブック	せんだいメディアテーク/プロジェクト チーム編	NTT出版	2005
16 せんだいメディアテーク年報2004		せんだいメディアテーク	2005
17 浦安図書館を支える人びと	鈴木康之、坪井賢一	日本図書館協会	2005
18 せんだいメディアテーク年報2005		せんだいメディアテーク	2005
19 神奈川県立近代美術館年報2005		神奈川県立近代美術館	2006
20 創造と交流:仙台市21世紀ビジョン	仙台市	仙台市	2007
21 つくる図書館をつくる	鈴木明・港千尋・多摩美術大学図書館 ブックプロジェクト編	鹿島出版界	2007
22 ひとまち事業財団 18年度事業報告		(財)仙台ひと・まち交流財団	2007

②論文

論文名	筆者	収録誌
1 「せんだいメディアテーク」はなぜ成功したか?	大久保邦子	社会教育 2002年1月
2 メディアテークはミュージアムか?	奥山恵美子	InterCommunication 2003年 春号
3 複合施設が拓く図書館の未来	奥山恵美子	都市問題 2005年9月号

③議会議事録・新聞記事

内容	時期
1 仙台市議会 議事録	1990-2004年
2 河北新報 記事	1994-2005年

④その他

内容	
1 テレビ番組 新日曜美術館「建築 現在進行形 ー伊東豊雄の挑戦ー」	NHK 2006年12月3日放映
2 展覧会 伊東豊雄 建築 新しいリアル	東京オペラシティアートギャラリー(東京)、 せんだいメディアテーク(仙台)、神奈川県 立近代美術館 葉山(神奈川)